石井鶴三作・島崎藤村像とその周辺
――信州大学蔵「石井鶴三関連資料」から――

五十里　文映（淑徳大学他非常勤講師）

一、はじめに

石井鶴三作・島崎藤村像には管見の限り次の八体がある。傍線部は本稿により明確になったと思われる事柄である。なお像の呼称は、本稿における便宜的なものである。

- 石膏像第一作　一体：昭和一七年から一八年にかけて制作されたもの。東京芸術大学芸術資料館蔵。
- 木像第一作　一体：昭和二四年以降長年にわたり制作されたもの。木曽教育会木曽郷土館蔵。
- ブロンズ像第一作　二体：二体とも昭和二六年に石膏像第一作から鋳造されたもの。木曽教育会木曽郷土館、藤村記念館（馬籠）藤村記念堂蔵。
- 石膏像第二作　一体：昭和二六年に制作されたもの（推定）。木曽教育会木曽郷土館蔵。
- 木像第二作　一体：昭和二六年以降長年にわたり制作されたもの。東京芸術大学芸術資料館蔵。
- ブロンズ像第二作　二体：（二体とも）平成一二年に鋳造されたもの（推測）。小県上田教育会石井鶴三美術資料室、松本市美術館蔵。

石膏像第一作、木像第一作、木像第二作の制作経緯等に関する大略は、鶴三の弟子であった笹村草家人[1]による言説や、藤村像の事業を遂行した木曽教育会の会員で特に中心的な役割を果たした川口五男人、中西悦夫らによる言説、またこれらをふまえた上で木曽教育会と鶴三との関わりや藤村像の制作・所蔵の経緯などをまとめている『木曽教育会百年誌』（昭和六一・一〇木曽教育会、以下『木曽教育会百年誌』）、さらに藤村木像とその木片の解析、関連資料の翻字・翻訳等を通して鶴三の造形論や藤村木像について一連の検証を行っている福江良純の論考の一つ「木曽の島崎藤村像と近代造形――石井鶴三「島崎藤村先生像」の木片調査――」（『信州大学附属図書館研究』平成三〇・一）などによって、了解されるところである。ただし全ての藤村像を対象にその経緯をまとめたものはこれまでなく、また今回翻字された、信州大学蔵「石井鶴三関連資料」の中の藤村や藤村像に関する鶴三宛書簡・葉書により明らかとなった事柄も多い。よって本稿ではこれらの書簡・葉書の全文と写真二葉を紹介しつつ、藤村像に携わる以前の鶴三と藤村との関わりより、藤村の長男で藤村記念郷理事長であった島崎楠雄の胸像制作までを、通時的に見ていくこととしたい。なお「石井鶴三関連資料」を掲げる際には、信州大学附属図書館が整理・保存のために付けた仮番号を【】内に示す。

二、藤村木像の未完性

木像第一作にとり掛かるとき、鶴三側も、木曽教育会側も、完成の期限は特にとり決めなかった。笹村は、昭和二四年七月末日の鶴三同席の木曽教育会との打合会において、「熟考の上、今夏以後数年を以つて年間随時に木曽で右の制作をする事」が決定したと記している（石井鶴三校閲笹村草家人「藤村先生造像経緯」『信濃教育』昭和二五年一月）。当時木曽教育会の常任委員で藤村木像制作の過程を写真で記録した中西悦夫も同様に、「ここに熟考の上、此の年八月以後数年を以って年間随時に木曽で制作することに」同日決定したと記す（「島崎藤村先生木彫像」『木曽教育』昭和二五・一二引用『木曽教育』昭和四九・三）。さらに、鶴三の制作態度をよく知る笹村が、「そのころ、私が「先生のことだから、これは五年以上かりますよ。」[2]と云ったが、誰れも本気にはしなかった」（「木曽と石井鶴三先生」『木曽教育』昭和四九・三）と述べるように、「以後数年」が「五年以上」となることもあるいはあり得ることとされていたし、木曽教育会の人々は、笹村が「木曽は谷深く水清く人は純である。この五星霜の間にいさゝかの不快もうけたことのないといふのは世の難しとする処だと思ふ」（「藤村先生の木像について」『信濃教育』昭和二八年八月）と吐露するように、また中西の「芸術は（…）献身的にそれにたずさわるという真面目な活動である。教育会が此の大事業を行うことが出来るのは、美しい一筋の勢が全会員の中に流れているからである。（…）私達は像の公共性を理解すると共に、此の像の完成へあらゆる力を集め育てて行かねばならぬ」（「島崎藤村先生木彫像」前掲）との言葉からも窺われるとおり、鶴三の藤村像の制作に対して深い敬意と理解を示し続けた。

笹村によれば、そもそも鶴三にとって彫刻とは完結しないものなのだという。

> 制作には非常に長い期間がかかっており、その後の主力は第二作にあっても、時には第一作にもかかるというふうにやられたのである。制作はこのようにして始まり、そして終っているのだが、終ったといっても、完結したのではない。先生の持論からすると、彫刻は完結しないもの、永久に完成しないものである。予め設定した形まで彫れば終りというのでなく、もっと良くする、もっと真実にしていくといった無限のものなのである。（「木曽と石井鶴三先生」前掲）

第二作にとり掛かった昭和二六年七月以降も第一作を完成とはせず二体並行して制作したことは、『石井鶴三日記』（Ⅰ～Ⅴ平成一七・三形文社、以下『日記』）に「第一作にも手を加う」（昭和二六年八月一七日）、「正面むきの方ひと先ず中止、床のまに安置まことに場所にふさいたりる斜めむきの方にかかる　頭部に刀を入れ両肩を少しおとす」（昭和二八年八月一八日）などと記されていることからも確認できる。

第二作の完成年と一般的に目されている昭和二六年の後に限って言えば、少なくとも昭和二七年には一月八日から一月一四日に（「石井鶴三略年譜―木曽教育会との関係を中心にして―」『木曽教育』昭和四九・三）、昭和二八年には八月一六日から八月二一日に（『日記』）、木曽での仕事場である奈良井の浄龍寺にて二体の制作に従事している。この昭和二八年八月の時点で笹村は、「第一作は九分通り成り、第二の作の頭をやゝ左へ傾けてゐる方も半成には達してゐる」と述べている（「藤村先生の木像について」前掲）。また

昭和二九年、鶴三は五月三一日から六月五日まで中央公論社画廊にて、「これによつて、いさゝか小生の彫刻生活の歩みが見られるようにとの考慮で、笹村草家人の選出した」（石井鶴三「寸感」『石井鶴三彫刻展目録』）一四点の彫刻と素描九枚とを展示した「石井鶴三彫刻展」を開いている。目録には笹村が「初期から今日に及ぶ発展と変化を理解できるやうにと精選」（笹村草家人「石井鶴三覚書」『石井鶴三彫刻展目録』）した作品が制作年順に記されており、「島崎藤村先生木像第二作（木）」が「昭和26年以来」と、まさに「今日」制作中の作として最後に記されている。なお、昭和二五年五月一四日に東京芸術大学で鶴三とイサム・ノグチが会談した際にノグチが「前額のあたりを指でかこってノミ痕を示し」て「セザニスト」（「立体主義者（キュビスト）」）と称えたのを（「石井鶴三覚書」前掲、笹村草家人「石井鶴三先生語録」『木曽教育』昭和四九・三）受けてであろう、前額の辺りにカメラを向けて撮られた鑿の痕の顕わな木像第二作の写真が、その表紙を飾っている。第一作についても、同じく『石井鶴三彫刻展目録』収録の「彫刻年譜草稿」に「昭和24年　63歳　木曽にて「藤村先生木像」にかかり今日に及ぶ」と記載されている。また白木公三「石井鶴三先生を憶う」（『木曽教育』昭和四九・三）によれば、昭和二九年八月二〇日から「二週間余り」、鶴三は奈良井に滞在している。その際浄龍寺を訪ねた白木に鶴三は「今日はこれだけですよ。」と一日中の木片を片手にのせて見せて下さった」という。川口五男人も、「藤村木像二体も私どもがみると完成されているようにみえるが、先生は木曽へおみえになるたびにすこしずつ手を加えられ、その木屑は小さな盃にちょっとはいるぐらいしかでない程度であった」と述べている（「石井鶴三先生遺作展をみて」『木曽教育』昭和四九・三）。鶴三がどれほど長い時間をかけて二体の木像と向き合い、熟考しつつ、慎重に手を加えていったかが窺われる。

続いて昭和三〇年にも、八月一七日から八月二一日まで浄龍寺に滞在（『日記』）、次の資料①（【書6―595】）からはこの年一二月にも滞在して木像の制作に従事したことが窺える。差出人の喜多武四郎は日本美術院彫塑部の同人で、鶴三が高く評価していた彫刻家である。[3]

①昭和三〇年一二月一八日付・石井鶴三宛・喜多武四郎書簡（【書6―595】）

初冬の晴天が続き今朝は最近で一番
寒気を憶へました
先生には厳寒に向ふ折柄険峻の地信州
に滞在にて引続き藤村像の御制作に御精進
の御由神意愈々御澄明の御事と存上ます
扨て昨朝は御厚志の金子有難く拝受
いたしました。御同情を得られぬと生活［一字不明　ミセケチ］［断
　左傍挿入］絶の
状態になり何とも慚愧に耐へません
御帰京の節に又御拝眉を得させて頂きます［改ページ］
御尊体充分御要心御大切になされ度存じます
　　極月十八日　　喜多武四郎
石井先生
　　御侍史

その後も、昭和三八年の秋に当時木曽教育会長だった磯川準一が鶴三に宛てて出した手紙の返事に、「藤村先生木刻像は陽気のよく相成りました節まかりいで制作続行致したく存じます」とあったという（磯川準一「追憶」『木曽教育』昭和四九・三）。島崎楠雄によれば、昭和四〇年一一月に馬籠の楠雄宅で胸像を制作した折、鶴三は富岡鉄斎を例に挙げて「あの長い生涯も九十余才に及び、死の寸前まで、芸術の道を全うした人です。（…）僕なども今、七十九才ですから、来年から十年間ぐらい、大いに頑張って、出来るだけよいものを作って行くように努力しようと思っています」（島崎楠雄「石井鶴三先生の追憶」『木曽教育』昭和四九・三）と語ったというが、丁度その頃でもあろう、川口五男人によれば鶴三は、昭和四八年に他界する数年前、二体ともまだ完成していないという趣旨の言葉を述べたそうである（「石井鶴三先生と木曽」『木曽教育』昭和四八・一〇、「藤村木像二体と木曽馬二頭を木曽で制作された石井鶴三先生―坐りましょう、作りましょう―」『信濃教育』昭和四七・四）。このように、「もっと真実」な「出来るだけよいもの」を求めて、鶴三は弛まず作品と向き合い続けた。「神意愈々御澄明」となっていく鶴三とともに、二体の木像もまた完結することなく芸術作品として発展、変化し続けたと言える。それは、彫刻家としての鶴三の偉大さを物語ると同時に、「藤村像を作るには、藤村先生と同じレベルの方でなければできない」との鶴三の言葉（「石井鶴三先生と木曽」前掲）をふまえれば、作家藤村の偉大さをも物語っている。

木像第一作は、蜂谷雅「石井鶴三先生作木彫藤村像について」（『木曽教育』昭和五〇・二）によれば、鶴三が他界した翌年の昭和四九年八月一〇日、木曽教育会館にて鶴三の養女石井蹊子の叔父で代理人の和田象二と木曽教育会長蜂谷との間で「石井鶴三作木彫藤村像第一作について」がとり交わされ、そのまま木曽教育会に「永久に保管」されることとなった。それまで第一作とともに木曽教育会で保管されていた木像第二作は、その際東京の石井家へ送られることに決まった。その後、板橋区中丸町の母屋、アトリエにあった「鶴三の作品（彫刻（石膏原型を含む）油彩画等の多数）は石井蹊子（中丸町）より東京芸術大学に寄贈され」（岩部定男「国立大学法人信州大学へ寄贈された経過について」『信州大学附属図書館研究』平成二四・三）、東京芸術大学芸術資料館に所蔵されることとなった。

三、藤村像以前における鶴三と藤村との関わり

詳しくは次節で見たいが、鶴三と藤村との初対面は昭和一六年一月一四日に大磯で左義長を見物した時とされる。鶴三と藤村におけるそれ以前の関わりと言えば、「童話　幸福（しあはせ）」（『婦人之友』大正一〇・一）の挿絵四画、現代長編小説全集６『破戒』（昭和四・七新潮社）の挿絵四画、『「夜明け前」第一部』（昭和七・一新潮社）の装丁と装画一画など、藤村の作品に鶴三が何度か関わったことがあった。このように仕事上で関わりのあったことが大磯での対面の間接的な契機となっているようである。

また、鶴三と藤村との直接的な関わりではないが、藤村の三男蓊助が編集発行兼印刷人となって小山書店から創刊した『随筆雑誌新風土』の、第一巻第一号（創刊号昭和一三・六）ならびに第一巻第二号（七月号昭和一三・七）[4] への執筆依頼を鶴三は蓊助から受けたことがあった。その依頼状が次の資料②（【書１０―２６７】）、資料③（【馬場５３―３８３】）である。後者には藤村の名刺が同封されており、蓊助を紹介するとある。

②昭和一三年四月二五日付・石井鶴三宛・島崎蓊助書簡（【書10―267】）（封筒【書10―260】）

拝啓時下春暖
の候いよいよ御清安
賀しあげます
さて此度小山書店
より季節と風景の
随筆雑誌「新風
土」を五月中旬六月
号を以て創刊いた
すことゝなり就ては
御多忙中まことに恐
縮に存じなから是非
御執筆いたゞきたく
お願ひ申し上げます
雑誌の主旨と□□
草木鳥獣風流な
どあらゆる角度から日
本の□□を初夏に浮
彫して頂き写真と挿
画を入れて全アート刷の
美しいものとし些かう
つたうしい時世に投じ
たい□存じます
枚数　四百字づめ二枚弱
別に挿画いたゞければ
半紙半切ほどのもの
期日　五月三日迄
みじかい日どりで礼を
失して居りますが悪
しからず重ねて願ひ
上げます
テーマは六月の風物人
情何にても御随意で
結構に存じます
右の□□ながら書中
失礼□も不顧御願ひ
申し上げます
匆々不一
四月二十五日
新風土編輯
島崎蓊助
石井鶴三様
御座右
不躾

③昭和一三年五月二九日付・石井鶴三宛・島崎蓊助書簡（【馬場53―383】）

啓上、
時下盛夏の候愈々御清安賀し上げます。
さて此度小山書店よりさゝやかな随筆
雑誌「新風土」を創刊致しました。
小誌別便にて御送付して置きましたが、些
かうつとうしい時世の中の清泉ともならば
幸だと存じ居ります。
ついては七月号誌上を飾りて頂きたく
七月の風物人情旅何にても御随意の
テーマで御執筆御願ひ申し上げます、［改ページ］
期日は六月五日迄。枚数は四百字づめ
三枚迄。（スケツチを戴けたらそれでも結講（ママ）
です）短い期日と書面を以ての御依頼
まことに礼を失して居りますが何卒悪
しからず折返し御返事お待ちして居
ります。　草々
五月二十九日
新風土編輯
島崎蓊助
石井鶴三様

〈「島崎春樹」名刺〉
新風土社、蓊助／御紹介申上げます

依頼のあった第一巻第一号（創刊号）、第一巻第二号（七月号）に鶴三の文章や挿絵等は掲載されておらず、鶴三は依頼には応じなかったようである。藤村の提案だというこの雑誌について、簡単に創刊の経緯を見ておく。以下、島崎蓊助『父藤村と私たち』（昭和二二海口書房）によれば、蓊助の生活態度を心配する藤村から、「先達て山崎さん（斌氏）が来ての話に、最近こんな雑誌が出来てなかなか馬鹿にならない成績をあげてゐるとのことだつた。事変になつて人の心も荒み勝ちの時に、かへつて恁ういふ時局には関はりのない読物が迎へられるのも面白いことだ」（一五二頁）と、ある雑誌を前に置き雑誌の出版を提案されたという。島崎蓊助『島崎蓊助自伝　父・藤村への抵抗と回帰』（平成一四・八平凡社一二〇頁）によるとその雑誌とは『随筆雑誌　三十日』のことらしい。[5] 小山書店（「O書店」）も藤村が仲介し、資金も藤村が半分、小山書店が半分出し、「編輯は自由に私の一存で塩梅し、経営、配本など事務的のことは一切O書店が引受けてくれ」た。鶴三への依頼状にも「写真と挿画を入れて全アート刷の美しいものとし」とあるように、「総アートペーパーを使つて写真や絵を沢山挿入」した「随筆」の雑誌という特色を持たせたこの雑誌は（一五三頁）、読者からも「眺める雑誌」（「編輯後記」第二巻第六号昭和一四・七）と目されたようである。このようにビジュアルを重視した雑誌であったことが、昭和一三年一月四日から『大阪朝日新聞』・『東京朝日新聞』の夕刊で連載が始まった吉川英治「宮本武蔵」（後編）に、「鶴三氏の挿絵のみは、小説からきりはなしても、画の生命を見失ふやうな怖れはない。箇々観賞にのぼせても立派に独立しての画格と創意とをそなへてゐる」（吉川英治「鶴三氏の挿絵」石井鶴三『宮本武蔵挿絵集』昭和一八・四朝日新聞社）と言われる質の高い挿絵を提供していた

鶴三への寄稿依頼に繋がっている可能性は高かろう。蓊助が「私には過ぎた執筆者達の好意が雑誌を一流の線にまで持ち上げてゐた」（一五四頁）と述べるとおり、第一巻第一号で言えば徳田秋声、柳田國男、石原純、安田靫彦、佐藤春夫、高村光太郎、斎藤茂吉、朝倉文夫、牧野富太郎、井伏鱒二、宇野浩二、戸川秋骨、室生犀星、里見弴といった具合に、著名な作家、画家、彫刻家、学者らの小品がずらりと並び、随筆に合うように選ばれた写真が所々挿まれている。毎号「まだ無名時代の土門拳の写真を「日本工房」のフィルムの中から捜してふんだんに」（『島崎蓊助自伝　父・藤村への抵抗と回帰』前掲一二二頁）使い、この土門の写真は「「新風土の写真」と云ふ言葉さへ作り上げた」（「編輯後記」第二巻第五号昭和一四・六）ほど反響があったという。藤村も第一巻第二号（昭和一三・六）に「麹町だより」を寄せ、冒頭で「創刊号にも何か書けたら送らうと約束して置いたが、それも叶はず、蔭ながらこの雑誌の前途を祝するといふにとゞめてしまつた」と謝し、第一巻第三号（昭和一三・八）に「消息」、第一巻第五号（昭和一三・一〇）に「土」、第一巻第六号（昭和一三・一一）に「ある人々に」とたて続けに寄稿しており、雑誌をもり立てようとする父の姿が垣間見られる。

ただし、蓊助と覚しき人物の手になる「編輯後記」は第二巻第二号（昭和一四・二）が最後となる。蓊助自身の言によれば、雑誌の売れ行きもよく、「ようやく生活も安定し、この分ならば先づ先づ大丈夫だとの信頼から」（一五四頁）書店主（小山久二郎）に勧められて結婚をしたが、途端にその結婚に「一切の過去の不名誉や社会的不信を少しづゝ挽回するにも役立つ」という「偽善」を感じとり、同時に「憂鬱」になり、「旬日を出でず」姿をくらましたのであった。藤村は「「今度と云ふ今度は弱つた。」と深い歎息を洩らしてゐた」という（一五九頁）。

一方小山久二郎『ひとつの時代―小山書店私史―』（昭和五七・一二六興出版七九頁）の記述によると、山崎斌が来て藤村が「私を見込んで」息子を「小僧としてあずかってくれ」と言っていると伝えられたため蓊助をひき受け、その後「藤村が彼への配慮ということで随筆の小さな雑誌をこしらえることを提案した」という。「この雑誌は思いの外うけて、当時一万部くらいの発行をつづけることができた」。小山邸によく遊びに来ていた親戚の娘を蓊助が見初めて結婚を申し込んできたため小山は仲立ちをしてやった。新居も構え、昭和一四年一月の松の内に挙式もしたが、三月目頃に蓊助は突然家出をし、「一月たっても二月たっても消息は杳として知れなかった」、とある。

蓊助の失踪により昭和一四年三月に出るはずであった三月号は欠号となって、翌月の第二巻第三号（昭和一四・四）では小山二郎「編輯後記」が「編輯責任者に先月来不慮の故障が生じました為め」と前月の欠号を詫び、第二巻第五号（昭和一四・六）では新しい編集陣による「アート頁の縮小とグラヴィア頁の拡張」という編集方針のもとで「新しい門出」をしている（「編輯後記」）。

四、藤村像制作の発端

笹村草家人の「木曽と石井鶴三先生」（『木曽教育』昭和四九・三）、「石井鶴三の藤村木彫」（『信濃教育』昭和二五・九）、石井鶴三校閲「藤村先生造像経緯」（『信濃教育』昭和二五・一）によれば、笹村は単行本で『夜明け前』を読み返して感動し、藤村がブエノスアイレスでの第一四回国際ペンクラブ総会に出席してアメリカ、フラン

スを経由した旅から帰国した昭和一二年頃、許しを得て月に一度ほど麹町の藤村宅を訪ねるようになり、藤村の「山の上に一本立つている霜白んだ槙の巨木といつた様な」風姿を何とかして残しておかなければいけないとの思いから彫刻の肖像を作らせてもらう許諾を得たという。「何でもその時の先生のお話に飛騨のアラヽギで刻んだら面白からうと云ふので寒中雪を踏んで木曽を通り高山へいつて江馬修さんのお世話になつた」が、戦時中で木材は奥地から出してくることができなくなっていた。また頼んではみたものの、「藤村先生の晩年の味わいというものは、霜枯れた老木というか、巨木のような感じで、当時の私の力量としてこなすことはむずかしいと実感し」事を進められずにいたところ、藤村が大磯の居へ移ってから（昭和一六年二月以後）、話が次のように展開したという。

そんな頃ある席で安田鞆彦さんと親しい天童さんという人が、藤村さんの像を石井鶴三さんに作らせたらどうだろう、とひょっと思いついて云われた。その話が石井先生に伝えられて来た。ところが、石井先生はすぐにおいそれとは積極的に乗っていかれない方である。そういう話を聞いたので、私は藤村先生の像を作らせてもらうという許可を得ているのだが、これは先生がやるべきだ。自分は潔く撤回して先生に作ってもらうようにしたいと申した。それで話はだんだんと石井先生が作るという方向へ進んでいった。（「木曽と石井鶴三先生」前掲）

右では笹村の造像の話とは無関係にこの話が不意にもち上がったようにも聞こえるが、笹村は次のような言い方もしている。

誰でもいゝから藤村先生の風姿を伝えるところの木像を作つてくれる人は無いかと思いましたが、この人ならと思う人も思い当たらず困つていましたところ、昭和十七年頃でしたか、藤村先生はだん〳〵年をとられて冬の寒さに耐えられないというので大磯の方へこもられることになりましたが、この頃天明愛吉さんが、それは石井鶴三が作るがよいと話をまとめてくれました。これなら申し分がないと私もホツとしました。（「石井鶴三の藤村木彫」前掲）

藤村像造像の経緯について笹村が説明するときには必ず、自分が藤村から造像の許諾を得たことから説き起こしているところを見ても、笹村による藤村像の話がもともとあったことから、天明愛吉が「それは石井鶴三が作るがよいと話をまとめ」た、と見るのが妥当であろう。その時期としては、笹村も「昭和十七年頃」と述べており、また「故藤村霊前に木像　石井鶴三氏の手向け」（『東京日日新聞』昭和一八・八・二六引用牧岩太郎「藤村先生像（試作）について」『信濃教育』昭和四九・九）に「藤村像制作の話が弟子の間に持上つたのは昨春」、すなわち昭和一七年の春のこととある。

天明愛吉（「天童さん」）は、若き日に弟子入りを請う手紙を藤村に出したのを機に相識になり、特に晩年の藤村と深く関わった。天明については黒川鍾信『高等遊民　天明愛吉　藤村を師と仰ぎ御舟を友として』（平成一六・五筑摩書房）に詳しい。黒川によれば、天明は昭和一六年一月一三日から三日間、藤村夫妻を自身の住む大磯へ招待し、その後、疎開先を検討していた藤村に来磯を勧めた。「大磯は温いからぜひこつちへ来てお仕事をしていただきたいと思つて、長い手紙を書いた」ところ、一〇日ほど経って藤村から借家の斡旋を頼む返事があったという（高田保・島崎翁助・中島玄良・天明氏・齋藤氏・田中氏・宮代氏・大内氏・船橋氏「座談会藤村と大磯」『改造文芸』昭和二四・一〇発言は天明）。大磯を訪れた翌月の二月二五日には藤村は麹町の自宅と天明が探した大磯町東小磯

の借家との往復生活を始めることとなる。以後昭和一八年八月に藤村がその大磯の家で逝去するまで天明は大磯での世話役として、また亡き後は墓守として藤村に仕え続けた。以下も黒川の記述をふまえながら、鶴三の『日記』と適宜照合しつつ、天明がとり結んだ鶴三と藤村との出会いについて確認したい。

一時藤村の勧めで役者を目指した天明は、明治四四年九月の文芸協会第一回試演観覧をきっかけに、俳優だった吉田幸三郎と親しくなる。その後日本画壇の新派、赤曜会の企画や運営面でのアドバイザー役となった吉田の目黒町三田の自宅を頻繁に訪れるうちに、吉田邸本宅の二階に住んでいた速水御舟とも親しくなり、「赤曜会の会員だった人たちだけでなく、先輩格の小林古径や安田靫彦との交友も始まる。堅実な作風が評価され彫刻や版画や挿絵で活躍している石井鶴三とも知り合」ったという（二五八頁）。昭和四年四月五日の『日記』には「天明氏使来る　絵二枚渡す」、同年六月二五日には「目黒に速水御舟氏を訪う」、同年八月一〇日には「天明さんの絵、大抵描きあげる」とあり、天明主催の展覧会のためか天明に絵を提供したり、吉田邸の御舟を訪ねたりしている。昭和一五年七月一八日には、大磯に昭和一二年に転居した天明に招待されて大磯の高麗神社の祭を見に行ってもいる（『日記』）。

「安田靫彦」は、大正三年の日本美術院再興の際の発起人および経営者同人として大正、昭和の院展を牽引した日本画家で、大正三年に大磯に居を構えた。鶴三は大正四年に同院に入り、翌五年に同人となった。また二人とも昭和一九年より、改組によって「日本美術院の陣容が教授陣として就任することに」なった（「昭和一九年の東京美術学校改革と横山大観」『日本美術院百年史　七巻』平成一〇・五日本美術院八六一頁）東京美術学校の教授となっている。昭和三六年二月に起こった日本美術院彫塑部解散においては、鶴三の書簡に「これに安田靫彦が同調してやったことで私としては解散の意志はない」（昭和四二年二月二一日付松村秀太郎宛『石井鶴三書簡集Ⅲ　石井鶴三・松村秀太郎　往復書簡』平成一一・一一形文社）などとあるように、解散を決議した理事会の長であった安田との間には大きな溝があるようだが、昭和一六年頃の『日記』には、昭和一四年五月一〇日「安田氏返電」、昭和一五年七月一八日「帰途安田靫彦氏を訪う」、昭和一五年一一月五日「奉祝展後期観る　靫彦の絵よしと思う」などとあり、知人としての付き合いがある様子である。

藤村の紹介によって新潮社に入社した大磯在住の英文学者菊池重三郎の提案を受け、天明は藤村、鶴三、中勘助に左義長招待の案内を出した（二九二頁）。鶴三も招待したのは、鶴三が以前藤村の作品に絵を提供したことがあるのを知っていたためだという（二九八頁）。この案内に対して、鶴三と中勘助からの返事には、「藤村氏や安田靫彦氏にお会いするのを楽しみにしている」といった趣旨のことが書かれていたというが（二九四頁）、『日記』昭和一五年一二月一九日の「天明氏（…）へ手紙出す」とあるのがそれであろうか。

『日記』昭和一六年一月一四日に、「午後支度して大磯に行く　三時一六分品川発汽車に乗る　澄男さんと同車　四時半着　天明氏を訪う　中勘助氏あり夜海岸に左義長焼くを見る面白し　九時発にて帰る　島崎藤村氏も来礒　面会す」とある。鶴三は日帰りしたが、その夜藤村と中勘助は大磯の大内館に泊まり、翌日初めて安田に会い、その際二月中旬の安田邸での観梅に招待されたという。観梅の日のことは藤村「慰問袋」（『改造』昭和一六・四）に見え、「先日も、わたしは大磯に住む美術院の安田画伯に招かれて、彼地に時を送つて来た。その日、午後三時過のことであつた。東京からは仲氏（ママ）、石

井（鶴三）画伯も同じやうに観梅の客として招かれて来てゐて、梅樹を愛すると聞く主人公が丹精からいろ〳〵な種類をあつめ植ゑてある後園の間を一緒に歩いた。（…）梅の老樹はことしのやうな冬にも蕾を支度し、あるものは早く、あるものは遅く、二月の生気を呼吸しながらそんな隠れた後園のなかに人を待つてゐて呉れた」とあって、二月の安田邸での観梅で鶴三と同席していることが分かる。『日記』昭和一六年二月一八日にも、「午後三時すぎ家を出で大磯へ行く（…）七時大磯着安田氏訪い平櫛氏古稀祝賀世話人を頼み快諾を得、天明氏による挿絵展たのまる　九時一分発帰る」とある。

以上から憶測すれば、藤村像制作の発端としては、笹村による造像の話があるものの長年着手に至れずにいることを漏れ聞いた天明が、昭和一七年の春、それには、笹村の師匠でもあり、以前から仕事上で藤村と関わりがあり、また自分や安田が大磯で藤村にひき合わせもしている鶴三が適任であろうと、鶴三の知人でもある安田に相談し、その話が鶴三に伝えられた、といったところであろう。ただし、他ならぬ藤村が、「たれがたのんだのでもなく、たのまれたのでもなく、」自分が座って鶴三が作る、それをこの事の「はじめ」としようと言ったと鶴三は伝え、またそのことを重視してもいる。

先生にすわっていただいて、さてこれから私が仕事にかかろうとした時、先生はあらたまって、「これはたれがおたのみしたのですか」といわれた。私にはちょっと意外なお言葉だったので、すぐにはご返事も出なかったが、「たれにたのまれたということはなく、天明さんから先生の寿像を作る気はないかといわれ、私としてはよろこんでお作りしましょうと申したことでした。」とありていにお答えしたところ、先生は「私はおたのみしたおぼえはなし、天明さんにはおたのみする資格はなし。それではたれがたのんだのでもなく、たのまれたのでもなく、私がすわってあなたが作る。ということではじめましょう。」といわれた。／先生が最初にこういう風にはっきりいわれたことは、その時はそれほどに感じなかったが、後になって大へんよかったと思ったのである。この像の制作がはじめから公の性質をもって出発して、たれという個人の所有に属さないということを明らかにされたというわけである。（石井鶴三「藤村先生寿像制作の頃」筑摩書房版藤村全集パンフレット『石井鶴三文集Ⅱ』昭和五三・七形象社）

なお笹村によればこの時藤村の方から「私の像を笹村草家人という人が作ることになっていた」との確認があったらしく、「石井先生はそのいきさつは知っておられたので、何の障害もなくその仕事をやられた」という（「木曽と石井鶴三先生」前掲）。

五、石膏像第一作

鶴三「藤村先生寿像制作の頃」（筑摩書房版藤村全集パンフレット『石井鶴三文集Ⅱ』昭和五三・七形象社）に、鶴三が天明に寿像制作の承諾を伝えてから数日後の夜のこととして、「先生にお話したらご承知になったと返事があった。なお今は調べものでいそがしいが、そのうちひまになるからその時にという、先生のお言葉も伝えられた。「東方の門」のための資料しらべのお仕事が近く一段落になり、創作におかかりになる前、しばらく休養をとられるので、そのあいだにということであったらしい」とある。

『日記』によればその後、昭和一七年九月二五日、藤村から「寿像制作につき明日午前一〇時半か午後二時半か、いずれにでも来れ」

との電話があり、翌日から翌月一二日まで計一一回、鶴三は麹町六番町の藤村宅へ通い「玄関脇の茶屋風の応接間で」（島崎楠雄「石井鶴三先生の追憶」『木曽教育』昭和四九・三）塑像を制作している。この間休んだのは計四日だけで、連日の作業であった。鶴三は「毎日一時間すわっていただいて、十日ばかりかかって一尺余りの坐像をつくった。私としてはむだのないよう仕事をはこんだのであるが、一日一時間十日間はぎりぎりのところであった」と述べている（「藤村先生寿像制作の頃」前掲）。また、同じく鶴三「藤村先生寿像制作の頃」（前掲）に、「これが自然でと、最初のポーズは正坐して左の膝の上に両手をかさねておかれ、こころもち左の方へむかれたお姿で、よいかたちであったが、二三日してこれでは疲れるので、こういう風になおしますといわれ、真前をむかれた。先生のおらくのようにと申し上げてあるので、異存はなかったが、少し姿勢をかえられただけでも、そのわずかの動勢をなおすことは、造型的には大へん骨のおれる仕事で、その時は私の方がへとへとに疲れた」との話がある。その出来事があったのは三回目となる九月二八日のことで、『日記』にも「今日島崎氏座席を換えられポーズ少し変更す　塑造の動勢を直し神経を余計に使いしと見え疲労を感ず」と記されている。

「もう大体出来上がり」という頃に藤村宅を訪ねた田中宇一郎は、珍しく応接間に上げられ、壁際に置かれていた「青い粘土じみた、土の香も漂ひさうな、みづ〳〵しい藤村自身の塑像」を見せてもらっている（『回想の島崎藤村』昭和三〇・九四季新書二四五頁）。藤村は、鶴三がここ暫く度々来て作っているもので「姿勢をくづされないから、モデルもなか〳〵疲れるもの」ということや、「これは原型ですから、すつかり仕上がるまでには、まだだいぶ長くかかるでせう。（…）石井さんは今度始まる美術院の展覧会にこれを出品するつもりださうですが、それまで間に合はせたいと云つてました」ということ、その他塑像の作り方など、事細かに説明したという。

一一回めの一〇月一二日、「不充分なれどやむを得ず」「今日にて写生了りと」し（『日記』）、残すところは石膏取りの作業となった。『日記』一〇月一六日に「下谷局にてはがき書き二五、六日参る旨速達にて島崎氏へ知らせる」とある。これに対する藤村夫人の静子からの返信が次の資料④（【書7―493】）である。

④昭和一七年一〇月一七日付・石井鶴三宛・島崎静子葉書（【書7―493】）

おはがき拝見いたしました今月二十五日
は先約があつて外出いたしますので、二十六、七日
頃にお願ひ出来れば好都合です　時間は
午前中の方よろしうございます　お出かけ
下さる朝でもお電話願へればおまちいたし
ます

九段、五〇三二
十月十七日

『日記』一〇月二六日には、「島崎氏寿像石膏取り八時半―一一時勝山氏」とある。「勝山氏」は少なくとも昭和九年六月以降八年以上にわたり、鶴三が度々石膏取りを依頼している人物である（『日記』）。藤村は「勝山氏が石膏に取るのを『かうするものですか』と云つて眺められたりした」という[6]（石井鶴三校閲笹村草家人「藤村先生造像経緯」『信濃教育』昭和二五・一）。

こうして石膏像第一作ができたが、藤村が言ったという、完全に仕上がるまでにはまだ大分長くかかり、次の展覧会までに間に合わせたいと鶴三が言っていたとの言葉によれば、その後も制作が続けられたことが想定される。約一ヵ月後の昭和一七年一一月二八日に鶴三が「志保原」で藤村を側面から素描しているのも（『石井鶴三素描集　第二巻』平成四・一〇形文社八四頁）、石膏像の制作に役立てるためであろう。[7] 石膏像は、昭和一八年八月三〇日に最後の手入れをされ（『日記』）、昭和一八年九月一日から二〇日まで東京都美術館で開かれた再興第三〇回日本美術院展に「藤村先生像（試作）」として出品された。笹村は「世の中では戦争が酷しくなり美術展どころではなくなりかけてゐる頃で、絶えてあの像についての批評も見なかつたが、あれだけのものを出してあるのにと思へた」（「藤村先生造像経緯」前掲）と述べている。

その直前の八月二一日、藤村が脳溢血の発作で倒れ、翌二二日に急逝した。鶴三は天明から電報を受けとり、二三日の大磯での葬儀に駆けつけた（『日記』）。田中宇一郎は、その日の通夜の霊柩の前に「絶筆『東方の門』掲載の最近刊中央公論や、石井鶴三氏の寄贈らしい自作宮本武蔵挿画集などが美しい献花とりどりの間に供へられてもゐた」と述べている（『回想の島崎藤村』前掲二五七頁）。藤村の絶筆となった「東方の門」（『中央公論』昭和一八・一、四、九、一〇）の挿画一画もまた鶴三の仕事であり、八月二三日印刷納本・九月一日発行の「最近刊中央公論」を鶴三が持っていた可能性は高い。それを供えたのが仮に鶴三であるとするならば、それは作品こそが、発作の直前まで原稿を書いており、発作中も「あそこで第三章の骨は出てゐるしね」と原稿のことを考え続け、静子が言うところの「この世を辞する事を明かにさとられて、この世の最後の感覚を深く味わった言葉、「涼しい風だね」を一言遺して静かに逝った（島崎静子「一人の甥に与ふる手紙」『中央公論』昭和一八・一〇）作家への、何よりの手向けであるとの考えからではないだろうか。またそのように最後まで芸術への努力を続けた作家に対する敬意として、「与へられた作品と四つにくむ」（吉川英治「鶴三氏の挿絵」『宮本武蔵挿絵集』序文）心構えで描いた自らの渾身の作、『宮本武蔵挿絵集』（昭和一八・四朝日新聞社）をその霊前に捧げたものと見たい。なお鶴三は三日後の二六日、東京青山斎場での本葬へも参拝している（『日記』）。「故藤村霊前に木像　石井鶴三氏の手向け」（『東京日日新聞』昭和一八・八・二六引用牧岩太郎「藤村先生像（試作）について」『信濃教育』昭和四九・九）は、藤村が鶴三に木彫の像をリクエストしていたことや、「廿六日の葬儀には墓前で、石膏だけは出来上りましたから御望み通り木彫にして差上げますと御報告致すつもりです」との鶴三の言葉を伝えている。

笹村は木像第一作に関して、「石井先生は塑造の心棒による造型を内のデッサンと呼び木彫の面による造型を外のデッサンと云ふ。これは作品の根本を支配する重要なものとみるから『始が肝心、塑造の心棒木彫の木取』と云はれる。今度の仕事にも石膏像の藤村像は傍らに置かれるが飽く迄参考であつてその機械的移しでない」（「藤村先生造像経緯」前掲）と解説している。これによれば、鶴三における石膏像と木像とはそれぞれ別個の作品と見るべきであろう。この石膏像第一作については、笹村も「あの像ができて始めて一見した時に私は藤村先生の姿を包むあの六畳の部屋の空気迄でてゐるのに驚いた。これは師匠近年の傑作だと思つた」と述べ（「藤村先生造像経緯」前掲）、鶴三自身も、「わが作れるものながら藤村先生そこにいますが如し」（「島崎藤村先生像刻木制作日記」昭和二四年八

月二〇日『石井鶴三全集』第九巻、『石井鶴三全集』昭和六一・三～六四・二形象社、以下『石井鶴三全集』）、「木彫をしながら塑像を見る　久しくつくづく思ふに無感激にてつちつけしたあとなく自分乍ら感じ入る」（『日記』昭和二五年一一月一八日）と記し、「石膏像は原型というにあらざれど　姿勢は大略それによることとしたれば傍に置きて仕事をなすあいだ知らず之にならわんとする傾なしとせず　今後厳にこれを戒めざるべからず」（「島崎藤村先生像刻木制作日記」昭和二五年六月九日前掲）と、木像第一作がこれに倣ってしまうことを自戒していた。塑造の動勢の修正というアクシデントがあったとはいえ、石膏像第一作は、「感激」の跡を宿す、鶴三の納得のいった作品であった。

六、木像第一作

昭和一九年八月二六日（『木曽教育会百年誌』三五一頁）、鶴三の作品が戦火で焼失するのを危惧した笹村は、石膏像第一作を「昭和十七年の学童図画審査以来の眤懇であ」った木曽教育会長鈴木迪三のもとに運んだ。「藤村像は生前の面影を伝える殆ど唯一の像だから公共の文化財として何とかしなければならない。（…）あすこにたのんでおいて辛くも烏有をまぬかれゝば関係者がみな死んでも藤村先生を思ふ幾莫の心が木曽には残るだらうから像を生かしてくれる人もあるだらうと思つた」（石井鶴三校閲笹村草家人「藤村先生造像経緯」『信濃教育』昭和二五・一）という。この鈴木迪三と鶴三について川口五男人は、「石井先生をよく御存じの方は鈴木迪三先生であって鈴木先生がおられなかったら、石井先生も木曽へ来られなかったと思います。（…）教育会との関係は、昭和十七年からで、この頃は鈴木迪三先生が会長をされていた。（…）石井先生が来られ、鈴木先生と種々話をされるうち、両先生ともお互いに俗の言葉でいうと惚れこまれたようです」（「石井鶴三先生と木曽」『木曽教育』昭和四八・一〇）と述べており、昭和一七年一一月一四日・一五日の「郡下児童作品批評及び図画教育についての指導」の講師を鶴三が受けて以来、両者の間には特別な信頼関係があったようである。

石膏像第一作は、「幾年か木曽教育会館の土蔵の中に保存され」（松原常雄「南窓雑記―鶴三先生を馬籠に御案内して―」『木曽教育』昭和四九・三）、その間、例えば昭和二〇年一〇月九日に木曽教育会と神坂村の藤村会が共同で藤村三回忌の法会を馬籠の永昌寺で行った折には、木曽教育会長の鈴木が山梨県上野原桐原の山荘へ行き鶴三の了解を得た上で、[8]永昌寺本堂の仏壇に置かれたという（菊池重三郎『馬籠　藤村先生のふるさと』昭和二一・一一東京出版一四四頁）。また昭和二二年、馬籠の藤村記念堂が落成した折にも借用された（「藤村先生造像経緯」前掲）。この時のものであろう、石膏像が藤村記念堂に置かれている写真が、その建築記である菊池重三郎『木曽馬籠』（再版昭和五二・二中央公論美術出版）に「記念堂の内部（中央奥）藤村像（石井鶴三作）」として掲載されている。

そして、昭和二四年、木像化をめぐって次のように話が展開した。

終戦後馬籠には菊池さんの肝入りで藤村記念堂もできる。その落成の折などには教育会から像をお貸しすると云ふやうになり、その後の折々の話に是非藤村先生の木像を石井先生が彫られる時には木曽でお仕事を願ひたいなどゝ云ふ話が鈴木先生から出て居つた。処がこの事たるや何の設備もない処で始めると云ふ事は容易でないので中間の私も簡単には首肯し難かつたのである。師匠もあれを木に彫りたい心積りはあるが、上述

の経緯で、着手すればその仕事は渾身の力を注ぐものになるのは必定で、さうなると軽くさそつた方は途中で弱つた事になつたものと云ふことにならぬでもない。これは東京でやるが先づ無事だと思ひ、殊に積年の木彫木取りの理を実作に試みるのは我々仲間では見ものだから、これは芸術大学石井教授研究室でこの冬あたりから何年がかりで始めて頂けば学生その他にも裨益する処が大きいし且つ着手もしやすい。そのつもりで準備の心配りを始めて居つた。処が木曽教育会からは今夏は是非木曽でお願したいといふ申込を受けたので、その実現に必要な条件を充分に誌し決して無理をされぬやうにとも書いた。（「藤村先生造像経緯」前掲）

木曽教育会側の発言も見ておけば、昭和二三年のある日、「石井先生が藤村像を石井教室へ持ち帰り木彫にしたいと云ふ話」について、当時の会長川口五男人が鈴木迪三に次のように語ったという。

藤村は木曽出身の文豪として私達の敬愛する方、石井先生は現代日本彫刻界に於ける尊敬する私達唯一の先生、この石井先生がたま〳〵藤村の像を製作され不思議な御縁でそれを木曽教育会で戦禍をお守り出来た。之は徒事ではない、それが今木彫に移されようとして東京へ持ち帰られる。これでよいか。／木曽は全国優秀の山林国である。其処に育った檜は世界随一の材として誇り高きもの、この檜と共に育った藤村の像が石井先生の御手によって木彫となる時、木曽材を選ぶより他何処の材が選ばれるか他なしの感がする。（蜂谷雅「石井鶴三先生作木彫藤村像について」『木曽教育』昭和五〇・一二）

また川口は、昭和二四年の始めに事業遂行の決断に至った経緯を次のようにまとめている。

当時教育会は会員数も少なく経済もまことに貧弱の時でありました。はたしてこの大事業を遂行し得るかどうか。教育会にとっては大へんな試練の場でありました。いろいろと全員の研究討議の末、尊敬する石井鶴三先生によって木曽の藤村の像が木曽の檜材で、木曽の地ででき、日本の国のお宝が木曽で誕生するという機会に際合しているということは天恵ともいうべきことで万難を排して協力遂行しなければならないと決断しました。制作に関する全経費・資財・場所等は教育会がやり、鈴木迪三先生のところで宿泊食事等一切を考えていただくことになりました。（「石井鶴三先生作木彫藤村像について」前掲）

このように鶴三の木曽での藤村木像の制作は、「積年の木彫木取りの理を実作に試みる」という芸術上の意義、ならびに、木曽の地で、木曽の人々が敬愛する木曽出身の文豪藤村の像を、木曽の人々が尊敬する彫刻家であり師である鶴三が、木曽の誇りとする材で作るという、郷土の一大文化事業としての意義を持って始まった。木曽教育会の人々と笹村で事前の検討と準備を重ねた後、昭和二四年八月二〇日、鶴三は仕事場として提供された奈良井の浄龍寺の一室に入った。[9] 以後少なくとも、昭和二四年には八月二〇～二八日、一〇月一五～二一日、一一月一五～一九日に、昭和二五年には六月七～一四日、七月二七～三一日、八月一八～二四日、一〇月一八～二二日、一一月一五～二二日に、奈良井の浄龍寺と馬籠の永昌寺に滞在し、約五〇日間木像第一作の制作に励んだ（『日記』）。その仕事ぶりは、「帰京まぎわの半時前迄連日没頭、徹夜の精進をされ他の何事をも顧みる余暇もないくらいで、一代の大努力を此の像に注いでいられる。無私無欲名利なく一すじに芸術への精進を続けられる」とい

うものだったという（中西悦夫「島崎藤村先生木彫像」『木曽教育』昭和二五・一二引用『木曽教育』昭和四九・三）。

七、石膏像第二作、木像第二作

笹村は木像第二作制作の要因について、次のように述べている。

第一作が完成に近づくにつれて、先生は第一作に不満をもたれた。第一作は原型と同じにはやっていないが、何といっても原型によっているところがある。藤村が亡くなって月日も経っているので、先生の頭には全生涯を貫いた結論としての藤村がイメージとして浮かんでくる。そのころ先生は、今彫っているのは田舎の名主みたいな感じだというようなことをいわれたことがあるが、もっと想念化された藤村というものを作りたいという気持が先生にあったと思う。これが第二作の動機である。作ろうとされたのは、例の藤村がからだを向けて、これがいいといわれた姿である。材木もまだあるし、やってみようという気持がのびていき、それを確かめるために、先生は粘土でやってみられた。それが教育会にある石膏像である。（「木曽と石井鶴三先生」『木曽教育』昭和四九・三）

『日記』昭和二六年一月一一日に「藤村全集よむ　晩年の随筆大いにおもしろし」とあるのは、第二作に向けて「もっと想念化された藤村」を掴みとるための作業の一端であろう。また鈴木迪三は、予備の材木があったことに加え、木曽での仕事の環境が快適であったことも要因に挙げている。

奈良井は大変仕事が出来ると申して喜んで居て下さいました。第一作が御気持よく順調に進みましたので万一の場合を考えて（…）準備してありましたので第二へ取りかかることになりました。私達は第二作に御取りかかり下さったこと、会場が先生の御製作に叶ったことも考へられ嬉しくありました。（蜂谷雅「石井鶴三先生作木彫藤村像について」『木曽教育』昭和五〇・二）

笹村が右に言及している「粘土でやってみられた」石膏像第二作については、鶴三が木曽から同居の妹和田光子宛に出した昭和二六年七月一八日付の葉書が注目される。

久しぶりにて　浄龍寺にて仕事をなす　のびのびとして快し
　前からやりかけの木彫と鋳造像台上に据えられあり　徐に仕事を進め居るところ　千村氏　新作石膏像を携え来られたり　明日は新に木取にかからんかと思う（『石井鶴三全集』第九巻四〇九頁）

「前からやりかけの木彫」は木像第一作、「鋳造像」は石膏像第一作をブロンズ化して昭和二六年五月に木曽教育会に寄贈したもの（後述）であろう。そして、「千村氏」が携えてきた「新作石膏像」というのが、「粘土でやってみられた」という石膏像第二作ではないか。「千村氏」こと千村士乃武は、『木曽教育会百年誌』によれば木曽教育会員の彫刻家である。明治四三年福島町の旧家に生まれ、木曽中学校から東京美術学校に入学するも中退帰郷し、母校や木曽高等女学校の美術教師をしながらこの事業に協力した（三三〇頁）。百瀬一清「石井鶴三先生」（『木曽教育』昭和四九・三）によれば、「先生が藤村像を彫るようになってから、木曽教育会の依頼で、その御手伝いをしたり、木曽馬の彫刻の時も開田村にお伴して先生の御世話をし、自分でも勉強したので、益々先生と親しくなり、ついに心服するように」なったという。特に、制作中の木像に干割れが生じない

よう苦心して保管に当たった[10]（鶴三「島崎藤村先生像刻木制作日記」『石井鶴三全集』第九巻、中西悦夫「島崎藤村先生木彫像」『木曽教育』昭和二五・一二参照『木曽教育』昭和四九・三）。また、鶴三は木像第二作に着手する前月の昭和二六年六月七日に木曽開田村西野へ行き、翌八日から一五日まで「木曽馬（一）」・「木曽馬（二）」の塑像を制作しており、その時の『日記』六月一二日に「千村氏石膏取り」と記している。これに関して、木曽教育会元会員の陶山光雄は次のように回想している。

この日は福島から千村士乃武さんが石膏取りのため、材料を一杯入れた重い荷物を背負って上って来た。（…）千村さんは翌日から石膏取りにかゝる。完成した「藤島号」の柔かい粘土の上に、惜し気もなく切金を差し込んで、その上から石膏泥をかける。丹精こめて作られた馬は、目鼻や体の凹凸まですっかりかくされ、馬ともつかない異様な形相となる。切金を抜いて中の粘土を取り出すと、先生の馬は空になってしまう。千村さんは石膏取りにかけては、非凡な腕を持っているので、安心してまかせられているという。（「木曽馬像の誕生」『木曽教育』昭和四九・三）

この時鶴三が描いた「木曽馬の石膏取りをしている所」の素描もある（一九五一年スケッチブック『石井鶴三全集』第九巻四二〇頁）。以上から、「粘土でやってみられた」塑像の石膏取りも千村に任せたことが想定されよう。

鶴三は昭和二六年になって初めての浄龍寺に七月一五日の朝到着しており（『日記』）、千村が「新作石膏像を携え」て来た一八日の時点で約三日間経過していることになる。この間の日記は残されていないが、「島崎藤村先生像刻木制作日記」（前掲）により木像第一作における手順を見ると、二日目に「終日室に籠りて素材前に置き石膏像を見つめ木取を案ず漸くにして基本の面数個を得たり」とあり、「基本形」を得る木取りを行う上では石膏像を見つめてどのように木取りをするか熟考しなければならないことが分かる。また、藤村宅へ通って一尺の坐像を作った時のことを鶴三は「一日一時間十日間はぎりぎりのところ」（石井鶴三「藤村先生寿像制作の頃」筑摩書房版藤村全集パンフレット『石井鶴三文集Ⅱ』昭和五三・七形象社）と述べてもおり、その大きさの塑像を造るのに二、三日を要することが分かる。また、この事業の開始時における「木曽で制作する」（「島崎藤村先生木彫像」前掲）とのとり決めもある。以上のことから、七月一五日の朝に浄龍寺に入り、まずは粘土で塑像を制作したことが推測される。すなわち、昭和二六年七月一五日から一七日までの間に石膏像第二作の塑像が制作され、一八日までに千村により石膏取りがされたのではないだろうか。光子宛の葉書にあるようにその後翌一九日から木取りにとりかかり、二〇日「木取り難行」、二一日「木取り細部に進行　概ね形態成し来る」と進む（『日記』）。この年、浄龍寺での滞在が確認できるのは、七月一五日～七月二三日、八月一六日～八月二二日、一〇月一日～一〇月八日の二〇日間強である（『日記』）。翌年以後も、ひき続き二体ともに制作され続けたことは第二節において述べた。

八、ブロンズ像第一作、ブロンズ像第二作

藤村記念郷が運営する馬籠の藤村記念館の藤村記念堂、ならびに木曽教育会の木曽郷土館には、石膏像第一作から鋳造されたブロンズ像第一作がそれぞれ所蔵されている（『藤村記念郷三十年誌』三

版昭和五五・一〇藤村記念郷六九頁、以下『藤村記念郷三十年誌』、『木曽教育会百年誌』三五六頁）。後述のようにどちらも昭和二六年、正式な依頼を受けて鶴三が七月と五月に寄贈したものである。まずその鋳造の依頼理由について、それぞれの状況から推察してみたい。

藤村記念郷は昭和二五年に設立された。その誕生に木曽教育会のそれまでの活動が深く関わっていることは『木曽教育会百年誌』（三六〇頁）に詳述されている。ブロンズ像第一作に関わる昭和二六年前後で言えば、藤村記念郷の常務理事安藤茂一は木曽教育会副会長を昭和一二年から二〇年まで務めた人物であるし、藤村記念郷理事の松原常雄は木曽教育会常任委員を兼任している。この頃藤村記念郷では、藤村資料館（藤村記念文庫／藤村記念第一文庫）の建設を目指していた。松原常雄「藤村資料館落成と回顧」（『信濃教育』昭和二八・八）、同「南窓雑記（二）―藤村記念郷の来し方行く末―」（『藤村記念郷三十年誌』）、「座談会　第二次　藤村記念文庫落成思い出話」（『藤村記念郷三十年誌』）によれば、昭和二二年一一月の藤村記念堂の落成の後、藤村生前の蔵書三千余冊の受け入れ先が問題となり、また藤村記念堂充実のために楠雄が買い集めた「夜明け前」原稿を始めとする資料や、全集編纂のために蓊助が中心となって集めた数々の資料もあり、それらの陳列、一般公開を期して、隣接する大黒屋の米倉土蔵を譲り受け、谷口吉郎の設計で中を改装して藤村資料館とすることが計画された。約二百万円の資金を要するため、木曽教育会が中心となって、昭和二六年一〇月九日付で「藤村資料館建設趣意書」を長野県の小中高大に送り、寄付金を集めるなどしたという。また、妻籠営林署へ何度も陳情し国有林の檜の払い下げを受けた。翌昭和二七年五月四日に落成内祝式を行い、八月二二日に開館、一一月一四日に公式披露の落成式を行った。

右の「藤村資料館建設趣意書」（『藤村記念郷三十年誌』）では、藤村資料館に展示するという「多数の貴重品」の中に「石井鶴三先生作藤村ブロンズ像」も含まれているが、後掲する、楠雄から鶴三に宛てた昭和二六年四月二八日付のブロンズ像依頼の書簡（資料⑤【書4―125 1】）に、「（記念堂にも一体）、何卒御許可下さい」と明記されており、当初から藤村記念堂に蔵する像を所望していたことが分かる。実は、藤村記念堂には藤村像がぜひとも必要であったと見られる。設計した谷口吉郎の「馬籠の記念堂」（『新建築』昭和二四・三）に、鶴三作の藤村像に関して次のような記述がある。

奥行7尺長さ13間半という細長い建物を建て、その中に、藤村と「ゆかり」のある人々の作品を並べて、「藤村記念堂」とした。（…）室内の幅は7尺しかないが、奥行は7間半、そんな奥深い正面の壁に、藤村の坐像が安置されている。像は首をうなだれ、瞑想しているかの如くである。／その像に向つて、室内のあらゆる水平線がパース（ペク）[11]チーヴに集中する。棟木、梁、鴨居、敷居、腰掛け、障子の桟、全ての水平線が、視覚的にその像に向つて集中している。そんな放射線の焦点に、藤村の像が置かれているのである。／開口部も奥に進むに従つて狭くした。即ち、手前には敷居までの四枚障子が開いているが、その奥は肘掛け窓とした。次に、その奥は書院型に壁を外部に出張らせて、その壁に戸袋を収めた。このように像に近づくに従つて、開口部を小さくしたのは、室内に奥行の感じを深めてみるつもりであつた。像の脇の壁には、小さい四角の下地窓を開け、それによつて、スポットのような投射光線を像に当てた。

この空間に藤村像はなくてはならないもののように思われるのだが、この文章が発表された昭和二四年三月の時点で存在する藤村像は石

膏像第一作のみで、この像は笹村が「落成の折などには教育会から像をお貸しすると云ふやうになり」（石井鶴三校閲笹村草家人「藤村先生造像経緯」『信濃教育』昭和二五・一）と言うところの、木曽教育会が鶴三から預かっているものを借用しているものである。[12] この石膏像は「木曽教育会館の土蔵の中に保存」（松原常雄「南窓雑記―鶴三先生を馬籠に御案内して―」『木曽教育』昭和四九・三）されたり、木曽教育会の展覧会や、東京博物館、近代美術館等の会場に出されたりもし、[13] また昭和二四年八月には木像第一作の制作に当たって奈良井の浄龍寺に用意され、昭和二六年一月二三日には東京の鶴三の手元にある（『日記』）。つまり藤村記念堂には長らく「焦点」が欠けていたわけで、資料館建設とはまた別に、像の所蔵は課題の一つとしてあったのではないだろうか。昭和二六年にブロンズ像が安置されたことで、谷口の企図した藤村記念堂がまさしく完成したわけである。昭和二八年八月発行の『信濃教育』には校正を経た谷口の同文「馬籠の記念堂」が掲載されているが、先の引用箇所は手直しされずに掲載されている。

なぜブロンズ像の依頼が昭和二六年であったかと言えば、その前年に木像第一作の制作を馬籠で行ったことで、鶴三と藤村記念郷の人々との親交が深まったことが関係するのではないだろうか。昭和二五年一一月一五日から二二日まで、鶴三は馬籠に滞在し、木像第一作の「仕上げのノミを馬籠の島崎家菩提寺永昌寺で」揮っている。それは当初からの決まり事で、「制作初期は原木の運搬、助手の参集、仕事後の作品の保管等の諸点が奈良井が便利であり、後期は藤村先生にゆかりの深い永昌寺本堂脇の一室を拝借して刀を執ることの意義によったもの」という理由から、「初期は奈良井浄龍寺、後期は馬籠永昌寺」と決まっていた[14]（中西悦夫「島崎藤村先生木彫像」『木曽教育』昭和二五・一二引用『木曽教育』昭和四九・三）。この時、一九日には藤村記念郷の理事長楠雄と弟翁助が訪ねて来たり、「夜安藤氏方にて安藤、川口、中西、原、松原、笹村、石井、千村懇談

専ら教育会が藤村記念事業に着手せる発端より川口氏会長就任までの経緯につき、安藤氏の話をきく」と、藤村記念郷の設立にも深く関わる木曽教育会の活動について詳しく聞いたりし、二〇日には楠雄・翁助らと共に登山もした（『日記』）。そして二一日には楠雄宅で谷口吉郎と面会しており、「同道して長昌寺（ママ）に来り　薬師仏を見せ仕事場にて制作中の藤村翁木像を見せ少時談話す　建築家と彫刻家共感する如し　お互いに胸の琴線にふるるものある如し」と『日記』に記している。藤村像を前に谷口本人と「お互いに胸の琴線にふるるものある」ような話をしたわけで、この時、あらゆる水平線が放射線になるように、また奥行きの深まるように綿密になされた藤村記念堂の内部の設計のことや、その「焦点」に藤村像が位置するようになっていることに話が及んだ可能性は高いのではないだろうか。

なお鶴三はそれ以前の昭和二二年一二月九日、鶴三の作品展を開催していた木曽教育会で一二月七日に講演をした後、安藤茂一の案内で藤村全集編集の資料が集まる楠雄宅（緑屋）の二階や藤村記念堂を参観しているため（『日記』）、藤村記念堂のことはよく承知していたはずである。この藤村記念堂は、「応援を吝まないという意志表示と激励を」（菊池重三郎『木曽馬籠』再版昭和五二・二中央公論美術出版七三頁）事業の当初から寄せて関わった谷口が、「この記念堂の建築工事は、すべて馬籠の村人によつて作られた。即ち、農民自身の「手仕事」である。（…）馬籠の記念堂は「詩魂」に捧げられた建築である」（谷口吉郎「馬籠の記念堂」『新建築』昭和二四・

三）と称揚するように、敗戦後の混乱の最中において馬籠の人々が郷土の偉大な作家藤村への深い敬慕によって手仕事で完成させた希有の建築であった。松原常雄によれば、「堂内に入るや、先程緑屋二階で見られた画のほか、安田靫彦氏の芙蓉の花は此処へ、佐藤春夫氏書藤村の初恋の詩はここへ、鶏二さんの恵那山の画はここへ、先生の作藤村像は此の一番奥のここへと考えているところです、と微に入り細をうがった説明」を安藤がするのを、鶴三は「じっと、うなずいて聞いていられた」（松原常雄「南窓雑記―鶴三先生を馬籠に御案内して―」前掲）という。この時安藤が藤村記念堂における藤村像の重要性にまで言及したかは分からないが、彫刻と建築とを本質的に同じ芸術と捉える鶴三においては、[15]谷口の設計に成る藤村記念堂には感ずるものがあったのではないだろうか。以上から、藤村記念堂にブロンズ像を安置したいとの依頼には、鶴三も一定の理解を示していたのではないかと思われる。

次に、木曽教育会についてであるが、ブロンズ像鋳造の依頼の理由は不詳である。『木曽教育会百年誌』（三一二頁）によれば、木曽教育会では「郷土館資料蒐集委員会」（昭和一七年）、「藤村文庫委員会」（昭和二〇年）、「藤村記念事業委員会」（昭和二二年）等が設けられ、いずれ設立する郷土館に収蔵すべく、藤村著書の初版本を始めとして木曽に関係する文人墨客の作品等、郷土文化の資料収集に当たっており、昭和二八年に、学制発布八〇周年記念事業として、所有していた土蔵を改装する形で木曽郷土館を設立し、資料を収蔵したという。昭和二六年におけるブロンズ像鋳造の依頼は、この資料収集の一環であるとひとまずは言えよう。さらに憶測するなら、『木曽教育会百年誌』に「昭和二四年から石井鶴三による藤村像の制作がはじまるので、藤村記念事業委員会の仕事はそれにしぼられていった」（三六三頁）とあり、木曽教育会の藤村記念事業としてはこれに全力を傾注したらしい一方で、制作中の木像は、笹村が「出来た藤村像は教育会が私するのでもない作者も私する人でない」（「藤村先生造像経緯」前掲）、「これが最も公共的な文化的な使命を果たすためには置場所を考えなくてはならない。出来上がれば石井先生はおそらく寄贈されると思うが、どこへ置くかは未だ定まっていない」（笹村草家人「石井鶴三の藤村木彫」『信濃教育』昭和二五・九）と強調しているとおり、公共物としての性格が強く、簡単には所蔵先を決められないものであることを受け、事業の成果としてまた木曽教育会にて永遠に保存しうる一体として、ブロンズの像を所望したのであったろうか。

次に、昭和二六年におけるブロンズ像の授受に関して見ていきたい。『日記』昭和二六年一月二三日に「藤村像石膏つくろう　鋳造にまわることになった」と、鋳造のために石膏像第一作を繕ったことが記されている。藤村記念郷と木曽教育会のどちらからの依頼を指すのか定かではないが、両者の密接な関係や後掲のブロンズ像受納についての覚書の文面が両者ほぼ同一であることなどをふまえれば、双方から同時に話があったのではなかろうか。以後ブロンズ像が寄贈されるまでの経緯については、藤村記念郷に関しては以下に掲げる理事長の楠雄からの書簡四点（資料⑤～資料⑧）によって明らかである。資料⑤（【書4―1251】）は、藤村記念堂に蔵するためにブロンズ像の鋳造を依頼したことを明白にするもので、常務理事安藤茂一、理事松原常雄が上京の上直接依頼に上がる旨を伝えている。

⑤昭和二六年四月二八日付・石井鶴三宛・島崎楠雄書簡（【書4―

1251】）

拝啓、新緑の候と相成りました、
その後、御無沙汰に打過ぎてをりますが、先生には
御壮健にてお仕事に御精進のことゝ存じ上げます、
扨、先生の御高作であられる「藤村座像」（石膏）の
ブロンズの件に就きまして、木曽教育会から川口、鈴木
両先生から上京の上、先生にお許しを得たといふこと
を聞いてをりましたが、当地、藤村記念郷でも、上京
して先生に直接お許しを得なければ、と考へてをり
ましたが、何しろ、記念事業の方で、いろいろと多忙
に追はれ、本年になつて上京も出来ない始末です、
先生から松原氏宛の御丁重なお手紙を拝見致し
まして、先生に御心配をおかけして恐縮に存じてをります、
一日も早く上京の上、先生のお許しを得たい念願を
強く持つてをりましたのですが、何としても只今の処、[16]営林
署から木材払ひ下げを受けるのに、留守にすることが
出来ませんので、幸ひ、明日、松原、安藤の両先生が
御多忙の中を御都合して上京されますので、当方の
気持もお伝へして頂けるものと嬉しく存ずるもので
あります、
本来なれば、小生もお伺ひをして、お許しを得なけ［改ページ］
ればなりません処、右のような事情により、都合出来
ませんので、両先生に御足労を煩はしたような次第
でございます、
ブロンズ作制（ママ）の件、（記念堂にも一体）、何卒御許可
下さいますよう、重ねてお願ひ申上げます、
不躾な手紙で失礼ですが、よろしく御依頼迄に、
匆々

四月二十八日夜　　島崎楠雄

石井鶴三先生

「木曽教育会から川口、鈴木両先生から上京の上、先生にお許しを得た」とある点は、『日記』昭和二六年四月二〇日にも、「美校　木曽鈴木、川口両氏笹村君同道来校　夜行にて今朝尾続に行かれ笹村君上京のところなりし故直ちに同行ありたる由」と確認できる。また『木曽教育会百年誌』（三五六頁）に、このブロンズ像の所蔵に関する「島崎藤村先生坐像受納についての覚書」が掲載されている。昭和二六年五月一〇日に鶴三から無償で寄付されたブロンズ像を「永久に鄭重な保管を致すと共に公共的文化活動に資」することを、昭和二六年五月一八日付、木曽教育会長理事青木広助の名で鶴三宛に証している。先述のとおり本文書の文面は、後掲の資料⑧（【馬場51—17】）中にある藤村記念郷の「島崎藤村坐像受納についての覚書」と殆ど同じである。

その後安藤が昭和二六年五月五日に上京しブロンズ像鋳造の件が正式に決定したことが、「安藤茂一氏来　「藤村記念郷」より藤村像鋳造正式にたのまれ承諾　鋳造費内金預る」との『日記』の記述から分かる。次の資料⑥（【書4—1252】）は楠雄からのそのことへの礼状である。

⑥昭和二六年五月一五日付・石井鶴三宛・島崎楠雄書簡（【書4―1252】）

拝啓、初夏の季節となりまして、若葉が美しく
眼に映じます、
その後御無沙汰申上げてをりますが、先生にはお元
気にてお仕事に御精進の由、感激致してをります、
この頃は当地より安藤茂一氏がお伺ひ致しまして、
種々御配慮頂き、嬉しく存じてをります、厚く御
礼申上げます、
実は私も同道して上京の予定でございましたが、
藤村記念事業のことで、（木材の伐切、搬出の会費
労力奉仕）どうしてもをりませんとまづい点などあり
まして、同道出来なかつたことは残念でした、
先生の御作、「藤村坐像」のブロンズの件に就きましては、
いろいろと御心労、御迷惑をお懸け申上げて誠に恐
縮に存じてをります、
安藤氏よりもお聞き及びのことゝ存じますが、記念
堂附属の「藤村記念文庫」（資料館）の設立に
目下著々と準備致してをりますが、妻籠営林署より
特別な払ひ下げを受け、御神木（伊勢神宮の）に匹
敵するような見事な檜やあすひの巨木の払ひ下げを
受けまして、漸く伐切も終り、搬出に取りかゝらうとして［改ページ］
をるわけです、
一方、谷口吉郎工博にもお願ひして、設計図の方も
早く製作して頂くよう、準備をすゝめて頂いてをります、
何しろ尨大な計画なので、その上資金難と費用［一字不明　ミセケチ］が
予想外にかゝりますので、それらの困難を克服して
事業の完遂を計るには容易なことでは全うする
ことも不可能かと存じてをります、
兎も角、村の総意、木曽教育会と手を握り合つて、
事業の完成に邁進して行く心を決めてをる次第でご
ざいます、
先生のお仕事もなかなか並大低（ママ）な御努力、御心労では
お出来にならないと深く存じ上げてをります、
お身体御大切に御精進のほどを祈ります、
右御礼までに、
笹村氏にもよろしく御鶴声のほどを、　草々

五月十五日

石井鶴三先生　島崎楠雄

松原常雄「藤村資料館落成と回顧」（『信濃教育』昭和二八・八）に昭和二六年「七月四日　石井鶴三氏作藤村像ブロンズ作者より寄贈、落合川駅より運搬」とあり、正式な依頼から二ヶ月程を経たこの日、ブロンズ像が藤村記念郷に届いたことが分かる。それを受けて楠雄がしたためた礼状が次の資料⑦（【書1―32】）である。

⑦昭和二六年七月四日付・石井鶴三宛・島崎楠雄葉書（【書1―32】）

拝啓、こゝ数日来不順な天気続きで困ります、
御無沙汰申上げてをりますが、先生にはお元気
にて御精進のことゝ存じます、
かねがね御高配頂いてをりました先生御作の
「藤村坐像」ブロンズ化は笹村氏を煩はして
実現致し、本日無事入手致しました、荷を解き、
拝見致しましたが、何等の損傷もなく、よく出来て
をります、一同に代り感謝申上げます、
安藤、松原初め、一同よりもよろしく申してをります、
右御礼までに、
草々

次の資料⑧（【馬場51―17】）は、藤村記念郷が鶴三の寄付により昭和二六年七月一五日にブロンズ像を受納したことを証する昭和二六年七月二二日付の「島崎藤村坐像受納についての覚書」と、税務署の承認を得る上での事務的手続きについて楠雄が笹村宛に送った書簡、ならびに、昭和二七年八月になって笹村が鶴三に宛ててそれらを送った際の書簡である。「島崎藤村坐像受納についての覚書」は藤村記念館（馬籠）蔵のブロンズ像第一作の受納の経緯や日付、とり扱いに関する事項を約した重要な文書であるし、また、先の資料⑥（【書4―1252】）の「笹村氏にもよろしく御鶴声のほどを」、資料⑦（【書1―32】）の「笹村氏を煩はして実現致し」などと合わせて、ブロンズ化に当たっても笹村が双方との連絡や事務的な手続き、あるいは鋳造もであろうか、全般的にひき受けて尽力したことが分かるものとなっている。

⑧昭和二七年八月六日付・石井鶴三宛・笹村草家人（【馬場51―17】）

冠省、古るい手紙類を整理してゐましたら
同封のものがでゝきました。島崎氏の手紙に
あるやうな不徹底な処がありますが、書類
の方は独立にある程度の価値はあると思
ひますからそちらへ保存しておいて頂きま
す。手紙にある点はそれなりの状態ですが
何か問題が起つた時［一字不明　ミセケチ］に取上げたらいゝでせ
う。
木曽教育会から馬のブロンズ寄与に関する
文書[17]お送り致す筈になつてゐます。その他
の件［に　ミセケチ］もありますが拝眉の上で　匆々
草家人
八月六日
石井先生

島崎藤村坐像受納についての覚書
財団法人藤村記念郷はその公共的文化団体なるにより
活動の一助として昭和二十六年七月十五日、石井鶴三先生から
一、島崎藤村坐像　昭和十八年石井鶴三作
を無償を以て御寄附頂きましたことは感謝に堪えません
本会は御寄附の貴旨に従い右の作品を永久に

鄭重に保管を致すと共に公共的文化活動に資し
これを他の目的に利用する等のことを致さぬ旨
昭和二十六年七月二十二日の本会理事会に於て決議
致しましたからここに右理事会の決議書の写しを
申添え右受納のしるしと致します

昭和二十六年七月二十二日

財団法人藤村記念郷理事長

島崎楠雄

石井鶴三殿

前略、大変涼しさが増して参りました、その後御健
祥で御活躍のことゝ存じます、
小生も相変らずですが、記念事業のことや、村のことで
飛び廻つてをりまして、過日、お手紙頂きながらも、遂々
延引致して了ひ申訳ございませんでした、お侘び申上
げます、
税務署の承認を得て石井先生の方に差上げるブロ
ンズの受納書は、過日木曽税務署長に会ひ、お願
ひして書類を置いて参りました処、十日［位　右傍挿入］前に署長
がわざ
わざ馬篭迄訪ねて来られ（恰度小生事、安藤先生と
記念事業講演依頼の件で長野へ赴きに在中）、この
書類は東京の税務署の承認を先に受けられ、東京
から木曽の税務署の方へ廻して頂くのが筋道でせうと、
案内に伝達し書類を置いて帰られましたので、同封にて、
教育会のと一緒にお送り致しました、（教育会からもまだ
木曽税務署へは来てをられぬ由）
右ご了承下さいませ、先生にもよろしくお伝へ頂き度

不一

九月十二日

島崎楠雄

笹村草家人様

なお、左方を向いているブロンズ像第二作が、小県上田教育会石井鶴三美術資料室ならびに松本市美術館に所蔵されている。小県上田教育会のものは、当会ならびに寄託先の上田市立美術館によれば、木曽教育会所蔵の石膏像第一作を原型とし、像の永久保存と小県上田教育会での所蔵を目的としてブロンズ化を依頼し、平成一二年に二体鋳造されたうちの一体を平成一三年三月二五日に購入したものだという。また、松本市美術館のものは当館によれば、平成一七年九月に搬入され平成二一年に寄贈された（『松本が松本のスタイルです vol.6 石井鶴三展―芸術は白刃の上を行くが如し―』平成二一・一〇松本市美術館）鶴三の遺品の中の一作だという。先の平成一二年に二体鋳造されたうちのもう一体であろうか。これらのことは小県上田教育会、上田市立美術館、松本市美術館の職員の方々にご教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。

九、島崎楠雄氏像

鶴三は昭和四〇年に、藤村記念郷理事長の島崎楠雄の胸像を制作している。石膏像は東京芸術大学芸術資料館に（『石井鶴三全集』第

一二巻六五頁)、ブロンズ像は馬籠の藤村記念館に収蔵されている(『藤村記念郷三十年誌』七〇頁)。次の資料⑨は、胸像を受け取ったことを伝える楠雄からの礼状である。

⑨昭和四一年一月一四日付・石井鶴三宛・島崎楠雄書簡(【他作1—553】)

拝啓、当地も正月は寒かつたり、温かくなつたり、
三寒四温の気候が続いております、
一昨日の雨で、馬篭の里には、今、雪はございません、
昨年は、いろいろと有難うございました
先日は、安藤先生、鈴木儀助君がお伺ひしてブロ
ンズの胸像を頂いて、帰つて参りました、
見事な出来で、格品の高い胸像を見て、只々感
服するのみでありました、
十六日、午後一時から、四方木屋新館の広間で、私の
還暦を記念して、胸像を贈つて下さるわけですが、
私としては身に余る光栄ですし、感謝感激に浸
るのみでございます、
その節、お借りして参りましたリユック、中に粗菓を
入れて、別便で郵送申し上げました、
三月に出る「木曽教育」に、先生の制作過程の事[改ページ]
を誌した拙稿を載せましたので、御笑覧頂ければ
幸甚に存じます、
右、御礼の言葉までに、申し上げます、　　匆々

一月十四日　　島崎楠雄

石井鶴三先生

ここから胸像が、昭和四一年一月一六日に開かれる楠雄の還暦祝のために、当時の藤村記念郷常務理事の「安藤茂一先生のお骨折」(島崎楠雄「石井鶴三先生の追憶」『木曽教育』昭和四九・三)で鶴三に依頼されたものであることが分かる。『日記』昭和四〇年一〇月八日に「九時半安藤茂一氏令嬢きよ子さん同道来臨、島崎楠雄さん今年還暦、お祝に同氏胸像制作依頼さる承諾、一一月行くことに大体きめる」とある。

胸像は一一月に馬籠に二度滞在して制作された。『日記』一一月一七日に「朝七・三五東京発—名古屋—中津川安藤、島崎両氏に迎えられ同車、馬籠、お寺諸方見た上　島崎氏新居ベランダで仕事をすることとし早速とりかかり夕方まで骨組に少し土つく」とある。楠雄によれば、「場所は四方木屋の別宅(八畳二室続き)、九尺幅の長い廊下があり、東南に面して陽当りが良く、先生は立って制作するのに最適な場所として選ばれ」、二日目、「最後の制作を終った瞬間、先生は無言のまゝその場に仰向けに倒れてしまわれた。(…)暫くして先生は起きられ、「いや、何でもありませんよ。今日は一寸、仕事が過ぎたようですね。」と言われた。(…)翌十九日からは昨日の事があったので、午前中二時間、午後一時間、正味三時間の制作にして頂いた」という(「石井鶴三先生の追憶」前掲)。一一月二〇日付田中武子宛の鶴三の葉書には、「藤村先生の御長男で先生のおもかげ濃く感心しました(…)絵も描きたく用意してきましたが　絵はかけそうもありません」(『石井鶴三全集』第一二巻六四頁)とある。

楠雄に藤村の濃い面影を看取するのは長い間藤村像と向き合っている鶴三だからこそであろうし、余裕があれば塑像だけでなく絵も贈るつもりであったことからは楠雄や藤村記念郷の人々に対する親密な気持ちが窺われる。

一七日から二一日まで五日間滞在し、二一日にいったん「午前一時間やってしまい　一六・一六中津川発名古屋から「こだま」で帰京」している（『日記』）。翌二二日には「石川氏方へゆき二七日石膏取りに来てもらうこと諸事うち合せ」をしている。「石川氏」は昭和三四年四月九日に高浜虚子のデスマスクを制作する際にも「石膏とりの名人」として鶴三が連れてきたという、石川季彦のことであろう（上村占魚「虚子先生のデスマスクの行方」『石井鶴三全集』第七巻月報）。東京美術学校彫刻科石井鶴三教室で学び、昭和三〇年に日本美術院の院友に推挙されている（田中修二編「作家略歴　彫塑」『日本美術院百年史　八巻』平成一一・三日本美術院七六三頁）。再び二四日に馬籠へ向かい、「八・三〇東京発名古屋―中津川着　二時間仕事」、二七日「午前池田氏、鈴木氏来られ仕事は大体一一時おわりとし軽く食事し、中津川へゆき石川氏迎え同車馬籠、ただちに石川氏石膏にかかってくれる　青天なので庭で作業好都合夕方終り　夕食ゆっくりいただき一八・三〇発、名古屋からは「ひかり」で帰京」という日程であった（『日記』）。計九日間の滞在である。

また鋳造に関して『日記』に、一二月五日「午前島崎氏像石膏手入れ正午後藤氏来おわたし　鋳造たのむ　今年中仕上げは少々むずかしいとのこと」、一二月二八日「後藤氏電話、島崎さん胸像鋳造はうまくいった由、色つけ見に来てくれとのこと」、一二月三〇日「二時後藤氏方へゆき島崎氏胸像色つけ見る　見ている間に軽くおはぐろをはいてもらいよくなりこの辺でよいとする　同道運んでもらう」とある。先の楠雄からの書簡にあるとおり、その後昭和四一年一月一三日までの間に安藤と藤村記念郷評議員の鈴木儀助とがブロンズ像を運ぶため上京し、一月一六日の還暦祝で楠雄に贈呈されたことになる。なお鶴三は当日は東京におり（『日記』）、還暦祝には出席していない。

一〇、おわりに

以上、藤村像制作に携わる以前の鶴三と藤村との関わりより、島崎楠雄の胸像制作までを辿ってきた。その過程で、これまで不詳であった像の制作年や鋳造の経緯、受納の日付等、明確になったものもあった。また、藤村像とその周辺をめぐって通時的に検討してきたことにより見えてきたことが二つある。一つは、既に言われているように、鶴三の特徴として、生涯を通しひたすら芸術への精進を続けた偉大な芸術家という面と、弛まず精進を続ける姿勢が周囲を薫陶する教師としての面とが挙げられるということである。もう一つは、何もかもを失った戦後の時代に、心の拠り所を学芸すなわち文化に見出し、それこそ不滅なるものと信じて復興に努めた人々の、その強い思いである。この二点について最後に述べたい。

昭和四八年、鶴三の葬儀の弔辞として盟友中川一政は次のように述べたという。「石井さんは学校の先生になったが、学校へいって一心に自分の勉強をしていた。石井さんが教えることと自分の勉強することをけっしてわけて考えていないでまったく一体に考えていた。（…）石井さん、あなたはからだの続く限り仕事を最後までされていて、よく働いた人が夜安らかに眠りにつくように逝った」（川口五男人「藤村木像二体と木曽馬二頭を木曽で制作された石井鶴三

先生―死を潔く―」『信濃教育』昭和四八・一一）。中川の言うところは、鶴三は教職に就いたが、日本美術院の「芸術の第一義に精進をつづける」精神（「日本美術院彫塑部の解散に就いて」昭和三六年二月一七日）、「研究第一として芸術を守ってゆくべきであるという精神」（昭和四二年二月二一日付『石井鶴三書簡集Ⅲ　石井鶴三・松村秀太郎　往復書簡』平成一一・一一形文社）を生涯貫き、またそれが「教えること」であるのだと、芸術の探究と教育とを一体のものとして考えていたということだろう。田中武子宛の葉書に「いたるところアトリエあり」（昭和四〇年一一月二〇日『石井鶴三全集』第一二巻六四頁）と書いているように、その姿勢はどこへ行っても変わることがなかった。その「無私無欲名利なく一すじに芸術への精進を続けられる」（中西悦夫「島崎藤村先生木彫像」『木曽教育』昭和二五・一二引用『木曽教育』昭和四九・三）姿勢に木曽馬籠の人々は、「日常の姿が先生の御期待にそむく様なことがあってはと思う心」を抱き（鈴木迪三談　蜂谷雅「石井鶴三先生作木彫藤村像について」『木曽教育』昭和五〇・二）、「私共平凡な人間にも「やらなくては」―という感動と情熱感を注」がれ（島崎楠雄「石井鶴三先生の追憶」『木曽教育』昭和四九・三）、「先生の御徳にあやかり、死の直前までせいいっぱい働いて死を潔くしたいと心に誓う」（川口五男人「藤村木像二体と木曽馬二頭を木曽で制作された石井鶴三先生―死を潔く―」前掲）。大正一三年から昭和四三年まで四〇年以上にわたり講師を務めた小県上小上田教育会の彫塑講習会においても同じであった。福江良純は、講師をひき受ける際鶴三が「私には教える自信はない。本気で一緒に勉強する」と言ったことや、講習生に配布する書面に「日本美術院は自由研究を主とす。故に教師なし、先輩あり、教習なし、研究あり」の一節を引用していることに触れ、「この有名な美術院則の一節は、石井の信州での実践を通して、教育会の人々に教師の模範的な態度として受け止められていく」と指摘している（「信州の教育会と彫刻家石井鶴三―立体を通した人間教育の90年史―」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』平成二六・八）。また、信濃教育会機関誌『信濃教育』掲載記事の検討を通して長野県教育界において鶴三がどのような意味を持って受容されたかを検証した大島賢一は、受容のあり方の一つに「児童作品や美術教育へと向かうその姿勢や人格は、美術教師に限らず教育者全般が目指すべき理想的モデルとして語られていった」ことを挙げている（「長野県教育界における石井鶴三の受容―『信濃教育』掲載の石井鶴三言及記事の検討―」『美術教育学』平成二九・三）。

このように偉大な芸術家であると同時に理想的な師でもあるような鶴三が、終戦の直後に藤村像を木曽馬籠の地で制作したことの意義を考える上で、次の川口五男人の言葉は重要だろう。

> 終戦の後、まだ人心はひどく動揺していた時代、日本は大きな過ちを犯し、教育もまた間違いをしていた。何もかも新しく出直さなければならないと考えていた頃です。それで人の気持ちを第一に引きつけるものは学問であり芸術である。それには先ず立派な学者の話を聞こうというふうに考えられていたときでもありました。こんな時、偶然石井先生の藤村像の話がでてきました。自然発生的でしたが、私ども学校職員の間の気持ちが、安定し明るくなったと思える程でした。暗黒時代にひとすじの光を与えていただいたのです。（「石井鶴三先生と木曽」『木曽教育』昭和四八・一〇）

敗戦により、信じてきたものが根本から否定され、心が動揺し目の前が真っ暗になったとき、その心を新しくし救ってくれると思われた

のが不滅の価値を持つ学問と芸術であった。その学芸の道に精進する師を、人々は求めていた。そのとき鶴三作・藤村像の事業が、一筋の希望の光となった、というのである。

このように学芸に何よりの価値を見出すのには、教育県としての風土が少なからず関与しているだろう。福江良純は、「信州の教育風土は、郷土以上に教育と文化の意義を尊び、その理念を洗練していく追究心に伝統を自覚しているように思えてくる。つまり、たとえ県外の出身者であったとしても、信州の教育上に多大な業績を残した人物は、その教えを県民の宝として大切に受け継ついでいくのである」と指摘し、それが最も端的に現れている例として鶴三をとり上げている（「信州の教育会と彫刻家石井鶴三―立体を通した人間教育の90年史―」前掲）。このことは、木曽教育会の藤村像の事業においても、藤村記念郷の事業においても同じことが言える。「財団法人藤村記念郷　設立趣意書」（昭和二五年八月二〇日『藤村記念郷三十年誌』）は「わたくしたち、藤村と血縁あるもの、あるいは郷土を同じくするものは、藤村の生涯の所産が、わが国の文化財として久遠の生命を保つのみでは満足することができない。／ここに同志相寄って藤村出生の地を選び、人間藤村の生涯の記念となるものを保存して、後代の人々のために計る」と宣言している。ここには木曽教育会における「尊敬する石井鶴三先生によって木曽の藤村の像が木曽の檜材で、木曽の地でき、日本の国のお宝が木曽で誕生するという機会に際合しているということは天恵ともいうべきことで万難を排して協力遂行しなければならない」（「石井鶴三先生作木彫藤村像について」前掲）との志と通底するものがある。すなわち、文化の宝を「久遠の生命を保つ」ものと信じ、それを生み出す「人間」を敬慕し、その「人間」と自分達との間に深い繋がりを見出して、同志と協力し合い、その文化の宝をこの地で永遠に「保存」することを志す思想である。

笹村草家人は、木曽教育会長の鈴木からこの風土の思想を感じとっていたからこそ、「内地爆撃は必至」で「どこに托しても何に托しても、もう当てになると云ふものは殆どない」状況の中（石井鶴三校閲笹村草家人「藤村先生造像経緯」『信濃教育』昭和二五年一月）、石膏像第一作をそこへ託したのだろう。思えば笹村もまた、藤村と鶴三を敬愛し、文化の永遠性を信じて力を尽くした人であった。藤村の巨木のような風姿を何とかして残したいとの思いから造像を言い出したのは笹村であり、おそらくその話が天明を経由し師による制作が決まった。「あれだけのもの」と、石膏像第一作の持つ芸術作品としての高い価値を認め、師が「我身や作品を疎開させるやうな人」でないことをよく知っていたため「生前の面影を伝える殆ど唯一の像だから公共の文化財として何とかしなければならない」（「藤村先生造像経緯」前掲）との思いのもと、「藤村を愛している人のところへ持つていつて置けば何とかなる」（「石井鶴三の藤村木彫」『信濃教育』昭和二五・九）と、像を布団でくるみ鈴木のもとへ自ら運んだ。事業開始に際しては「今後何年かゝるかわからないが途中でぐにや〳〵になつては困りますよ」（「石井鶴三の藤村木彫」前掲）と会長の川口に念を押し、木曽教育会の人々にこの制作の彫刻史上における意義を説き、折に触れて像の公共性を強調した。「一切を忘れて此の像の完成へ注ぐ努力は並々ならぬものがあり、皆の心を打った」（中西悦夫「島崎藤村先生木彫像」前掲）と言われるほど、藤村像の仕事を陰日向になって支え、後代のために制作過程の詳細を「藤村先生木像制作覚書」、その他『木曽教育』や『信濃教育』に寄せた文章によって伝えている。

島崎藤村像は、鶴三が探りあてた藤村の真実をその立体に湛えている。そして、多くの人々の学芸への憧憬とともに、後代の今日に存在している。

注

(1) 笹村草家人「木曽と石井鶴三先生」(『木曽教育』昭和四九・三)に「昭和十年、二十九才の時から、昭和三十四年二月先生が芸大を停年退職されるまでが、密接に接触をしていた時期である」とある。

(2) 奈良井での仕事場である浄龍寺を「借ります」の意か。

(3) 「私は佐藤に誘われて日本美術院に入ったわけで、美術院の研究所でそれからの猛勉強がはじまった。(…)佐藤、中原、戸張、私。少しおくれて保田龍門、ずっと若手として喜多武四郎、木村五郎とかいう連中も加わって本当に猛勉強しました。血みどろになってというか、しのぎを削ってというか。(…)これがたいへんよかったと思う」(石井鶴三「私の彫刻修行」彫塑研究四十年記念講演昭和三九・一〇・二五於上田清明小『石井鶴三全集』第一一巻)とあるように、鶴三は日本美術院彫塑部同人の彼らを同志と見ており、特に喜多のことは次のように高く評価していた。「このトルソーは誠に美しい凸凹の妖怪です。見る人の魂に何とも云えず喜びを与えてくれます。こう云う美しい妖怪が人体の中には住んで居るのです。喜多君がこれを人体の中に見出し、ひきぬいて見せてくれたのです。ものの美しさ、立体の美という事のわかる人であったら、恐らくこの作品に対した時共鳴を感ぜぬ人はありますまい」(石井鶴三「院展の彫刻」『アトリエ』大正一三・一〇『石井鶴三全集』第二巻)、「真摯な努力をつづけて来た人で、其仕事は実に純粋である。彫刻の感性のある者は此人の仕事を喜ぶのであるが、何等景物がないから他人には注目されない」(石井鶴三「日本美術院の彫刻」『三彩』昭和二四・一一『石井鶴三全集』第九巻)。日本美術院彫塑部が昭和三六年二月一三日に「芸術の第一義を護り彫刻の本質を追究して来たわれらと、世俗を顧慮し時流に迎合せんとする一部の者とのあいだに、多少の隔差を生じ摩擦があったということ」(石井鶴三「彫刻とは」『芸術新潮』昭和三六・四『石井鶴三全集』第一一巻)という事情により解散となった時、鶴三は、喜多、宮本重良、松原松造、村田徳次郎、田中太郎の連名で声明「日本美術院彫塑部の解散に就いて」(昭和三六年二月一七日)を出し、翌三七年に板橋の自宅内にアトリエを新築し、研究所を興した。翌三八年までに喜多は同研究所で作品四点を制作している(「喜多武四郎年譜」『喜多武四郎作品集』平成一四・一〇碌山美術館編集発行)。しかし松村秀太郎宛の鶴三の書簡によれば研究所は「一年くらいはなんとかつゞいたが同志の人もしだいに来なくなり結局私ひとりが孤るいを守っている」状況となった(昭和四二年二月二一日付『石井鶴三書簡集Ⅲ　石井鶴三・松村秀太郎　往復書簡』平成一一・一一形文社)。同じく松村宛の書簡に鶴三は、自分が今も大切にしている「院は研究第一として芸術を守ってゆくべきであるという精神」について説き、「私にもう少しお金が入れば研究所も費用全部私がまかなえるようになり現在無名の若い人の中からほんとうの同志が出てくるのではないかと夢をもっています」(昭和四二年二月二一日付、昭和四二年三月一六日付『石井鶴三書簡集Ⅲ　石井鶴三・松村秀太郎　往復書簡』前掲)と述べている。資料①(【書6―595】)に見られるような喜多への経済的工面も、「真摯な努力をつづけ」「実に純粋」な仕事をする芸術家の喜多を「研究第一として芸術を守ってゆくべきであるという精神」で繋がった「同志」と思ってのものであろう。

(4) 奥付は六月一日発行となっているが「七月号」であり、七月一日発行の誤植と考えられる。

(5) 『随筆雑誌　三十日』は、昭和一三年一月に野田書房から創刊された随筆雑誌で、「何か、かう気の利いて、明るくて楽しい雑誌、香りの高い紅茶を飲み乍ら、ちよつと手にとつて洒落れた雑誌、肩の凝るものではなく、電車の中、人を待ち合はせる合間にでも手軽に読める雑誌、それで居て読み捨てるには余りに惜しい綺麗な雑誌」(野田誠三「編輯後記」創刊号)という企

図により作られた。蓊助は「一篇の随筆を一頁に赤線で囲む二色刷りで三十頁、つまり〝三十日〟に分けた割付けが気がきいていた」（『島崎蓊助自伝　父・藤村への抵抗と回帰』前掲一二〇頁）と述べている。目次も、創刊号で言えば、「一月のカレンダア」の題字のもと「1元旦の感想　辰野隆（土）」から「31社中カレンダア（月）」まで、三一篇の小品に日にちと曜日が割り振られ、日曜日に当たる部分が赤字にされ、「目次を一眼見渡せば、もう立派なカレンダーが出来上つて居る」（野田誠三「編輯後記」創刊号）という凝ったデザインである。また頁も、「1日（土）」、「31日（月）」のように日にちと曜日で表記されて目新しさがある。「売れた、売れた、創刊号は、文字通り羽が生えて飛んだ。（…）ざつと万に近い部数をまたゝく間に売り尽した」（野田誠三「編輯後記」昭和一三・二第二号）、「本誌の売行は依然として驚異的です。書店からの返品が一割もないといふ雑誌は、めつたにないさうです」（野田誠三「編輯後記」昭和一三・五第五号）とあり、創刊と同時にたちまち評判になったようである。第二号（昭和一三・二）に雅川滉「藤村と秋声」が掲載されており、それを話題に山崎斌が藤村に持ち来たったものであろうか。第六号（昭和一三・六）の「編輯後記」には「最近、随筆が非常に注目されるやうな形への方向の、色が濃くなつて来た様です。全く随筆こそ、彩らない文学の姿であり、文章の要素であるとも云えませう」とある。後述するように創刊当時の『随筆雑誌　新風土』はその随筆に写真を組み合わせ、全誌アート紙にした点に第一の特色があった。

(6)　全一二回の日時は以下のとおりである（『日記』）。昭和一七年九月二六日三時半すぎ、九月二七日一〇時―一一時半、九月二八日一〇時、九月二九日一〇時、一〇月一日、一〇月二日、一〇月四日三時半、一〇月六日、一〇月一〇日、一〇月一一日午後、一〇月一二日午後、一〇月二六日八時半―一一時。なお、黒川鍾信『高等遊民　天明愛吉　藤村を師と仰ぎ　御舟を友として』（平成一六・五筑摩書房三二一頁）によれば鶴三は天明に昭和一七年九月二六日付で次の葉書を送っている。「秋冷ノ候御さはりもございませんか　昨日島崎先生よりお電話あり　今日参上　御寿像敬写にかゝりました　ひきつゞきポーズして下さる趣でございます　その為大磯へはしはらく御無沙汰致すへく　松林氏へ何卒よろしく」。

(7)　鶴三校閲の笹村草家人「藤村先生造像経緯」（前掲）には石膏像第一作の制作に関して、「石井鶴三と云ふ人は仕事にかゝる迄に肚の中の用意が大変な人である。以前から藤村先生とは旧知で彫刻に作りたい人の一人に感じて居られたから何かの席で一緒になる機会には、この前は前に坐つたから今度は側面の見える位置にと考慮して坐つて心にはいろいろ既に蓄える処があり、藤村先生を詠じた歌なども／きせるもつ如きてぶりにまきたばこもちてのみませり藤村先生／上座なれど藤村先生の横顔を見まつらまくとあへて坐れり／あつた程だから直ぐにも仕事にかゝれたのは幸せだつた」とある。これによれば鶴三は左義長で藤村と会った昭和一六年一月一四日以降、モデルとして藤村に関心を持っていたことになる。ただし川口五男人「石井鶴三先生と木曽」（『木曽教育』昭和四八・一〇）では、「藤村像を造るに当たって石井先生は、藤村の著書を読むとか、あるいは宴会の時の盃の持ち方、きせるの吸い方をやってみるとか、上座に座ってみるとか制作までの用意は、大変なものであったようです」と述べ先の二首を引いており、藤村像制作が決まってからのエピソードとして紹介している。いずれにしても制作における鶴三の姿勢を伝えるエピソードであり、宴会時の藤村を描いたように見えるこの「志保原にて」と記された素描は、当エピソードの蓋然性を高めるものである。

(8)　鶴三は昭和二〇年以後数年にわたり、山梨県北都留郡桐原村（現上野原市桐原）の山荘へ往来していた（「石井鶴三先生略年譜」上田彫塑研究会彫塑五十年記念誌特別委員会編『石井鶴三先生―信州上田と―』昭和四九・一〇小県上田教育会）。昭和二五年五月一四日の東京芸術大学における鶴三とイサム・ノグチの会談に当たり笹村が用意していたという、「明治以降の日本彫刻史の概要と草家人の師である石井鶴三（1887-1973）の来歴および、石井の木彫代表作「島崎藤村像制作工程解説」」を記した英文小冊子〝My Present to memory〟（『記念のために』）中の「石井鶴三について」には、「彼はこよ

なく山岳を愛する。（…）彼は、山梨県山中に小さな山小屋を持っていて、そこは彼にとって変わらぬ安息の場所である。彼は、たった一人、その山小屋で百姓暮らしをしている。空、雲、清水、緑の森林や夜の暗さなどは彼に活力を与える」との記述がある（福江良純「翻訳　笹村草家人"My Present to memory"―イサム・ノグチに伝えられた日本近代彫刻史と石井鶴三―」『信州大学附属図書館研究』平成三一・一）。笹村は昭和一九年八月に桐原村の尾続に転居し昭和五〇年九月に急逝するまで永住した。川口五男人「鈴木先生を憶う」（『木曽教育』昭和五一・三）に尾続を訪れた際の話がある。鶴三の「粗末な木造の平屋建の山小屋にもにた家」は、笹村の住まいから歩いて一〇分ほどの所にあったという。

(9)　なおこの二日後の昭和二四年八月二二日は、藤村七回忌の日であった。この日大磯の地福寺では、馬籠の藤村記念堂（昭和二二年）も手がけた谷口吉郎設計による墓所の竣工式を兼ねた法要が開かれた。「土葬だつたので、土がすつかり固まらぬ間は重たい石がのせられなかつた」（高田保「ブラリひょうたん　藤村忌」『東京日日新聞』昭和二四・八・二三）ために久しく標木のままになっていたのだった。これに鶴三も招待されている。

昭和二四年八月一五日付・石井鶴三宛・島崎楠雄書簡（【書4―1253】）

拝啓
本年八月二十二日は亡父藤村の七回忌に当り、
大磯地福寺の墓碑も完成いたしましたので、法
要のしるしを営み度いと存じます。就きまして
は炎暑のみぎり、甚だ恐縮に存じますが、大磯
まで御出まし願へれば幸に存じます。
式終了後、亡父を偲ぶ集を催し度く、粗茶
差上げ度いと存じます。勝手ながら同町の
大内館まで（午後三時）御越し頂き度う存じ
ます。尚、御手数ながら、出欠の可否、折返し
御返事頂き度う存じます。　敬具
一、場所――東海道線大磯町、地福寺
一、日時――八月二十二日、午後一時
昭和二十四年八月
島崎楠雄
石井鶴三様

鶴三は八月一九日の夜行列車に乗って二〇日六時半頃に奈良井へ着き、「木曽の人々と笹村君の骨折により万端よくはこびくれあり」という浄龍寺に入っている（『日記』）。「これより七日余りわれはここにこもりて専心木彫をなさんとするなり　まことによき場所の与えられたるかな　仕事の進みもおのずから快適なるべし　天に謝しあわせて人々の深き心づかいをありがたく思う」（「島崎藤村先生像刻木制作日記」八月二〇日『石井鶴三全集』第九巻）というように大事を迎えていた時で、「島崎藤村先生像刻木制作日記」にも日々の記録が明らかなとおり、この七回忌には参列していない。なお翌昭和二五年一月二二日、大磯の安田靫彦を訪問した帰途に墓参している（『日記』）。

(10)　鶴三は昭和二七年七月から、昭和二四年の火災で焼損した法隆寺金堂の、雲斗雲肘木の補作に従事しており、「刻を助くるもの」に千村を加えた（スケッチブック『日記』Ⅲ三四六頁）。期間中「堅実性」に欠ける千村を問題視する場面もあるが（昭和二七年九月一七日付笹村宛葉書『石井鶴三全集』第九巻四九〇頁、『日記』昭和二七年九月二六日）、同年一二月の落成まで「其間全員よく精進したり」と記している（スケッチブック前掲）。『木曽教育会百年誌』に、「昭和二七年には石井鶴三から選ばれて法隆寺金堂修理に参加した。以後彫刻家としての自己の限界と闘争しながら悶々（ママ）と日々を送った。昭和三二年三月上松中学校に在職中自らの手で生涯を閉じた。（四八才）」とある（三三〇頁）。百瀬一清「石井鶴三先生」（前掲）に「とにかく石井先

生と一緒の時が一番幸福な日であったと、今上松に住む未亡人静子さんも当時を追懐しています」と記されている。

(11) 谷口吉郎「馬籠の記念堂」（『信濃教育』昭和二八・八）により補った。

(12) なお後に挙げる松原常雄「南窓雑記―鶴三先生を馬籠に御案内して―」（『木曽教育』昭和四九・三）と『日記』の記述から、昭和二二年一二月九日の時点で藤村記念堂内には藤村像を含め藤村ゆかりの人々の作品がまだ揃っていないことが分かり、昭和二二年一一月一五日に行われた落成式には像はなかったものと見られる。菊池重三郎『木曽馬籠』（再版昭和五二・二中央公論美術出版）によれば、落成式の直前まで建築作業に追われ、藤村記念堂に並べる藤村ゆかりの人々の作品についても、例えば安田靫彦「芙蓉」の画は、落成式二日前の一一月一三日頃に仕上がる予定で、仕上がらなければ「次回を待つ」（一五八頁）といった状況であった。

(13) 石膏像第一作については、「度々会場にも飾られ」（松原常雄「南窓雑記―鶴三先生を馬籠に御案内して―」前掲）、「東京博物館に貸し目下は近代美術館に出てゐる」（笹村草家人「藤村先生の木像について」『信濃教育』昭和二八・八）などの言及がある。なお、藤村像が展示された会場の様子を伝える資料として、台紙裏面に「木曽・城山写真館・福島―電話一二六番―」の印字のある写真二葉がある（図1・図2【【書6―87】】）。藤村像一体と複数の画が展示された会場を撮影したものである。木曽教育会が昭和一九年に疎開のために笹村から預かった鶴三の作品は、石膏像第一作のほか「十数点の油絵、宮本武蔵のさし絵数百点、数冊のスケッチブック」（川口五男人「石井鶴三と木曽」『木曽教育』昭和四八・一〇）である。そのうちの油絵には、「山上雨後・渓流・ポンポンダリヤ・樹下美人・浴女」（「石井鶴三先生遺作展をみて」前掲）・「自画像」（「南総雑記―鶴三先生を馬籠に御案内して―」前掲）が含まれるという。預かった作品は昭和二二年、昭和三八年の少なくとも二度にわたって返還されたようである（「南総雑記―鶴三先生を馬籠に御案内して―」前掲、磯川準一「追憶」『木曽教育』昭和四九・三）。昭和三八年に返還されたもののうちには「「狂女入浴」「樹下美人」「自画像」「ポンポンダリヤ」等先生の画歴を語る油絵十二点とデッサン帖」があったという（「追憶」前掲）。これによれば宮本武蔵の挿絵については昭和二二年に返還された可能性が高い。

写真の一葉は、それぞれ額に入った画が五枚、壁に飾られており、左から「自画像」（大正一〇年頃油彩画）・「山上雨後」（昭和二年油彩画）・「浴女」（昭和四年油彩画）・「渓流」（昭和七年油彩画）・「女と男」（大正一三年油彩画）に見える。また、床に据えられた台の上に、壁の画と同程度の高さの位置で、正面を向く第一作の藤村像が一体置かれ、台には「藤村先生ノ像」と書かれた紙が垂らされている。石膏像か木像かは判別できない。もう一葉は、額入りの画が七枚、その下に額無しの画のようなものが六枚、壁に飾られている。床に演台らしきものが置かれ、その上に白い用紙の束らしきものが写っている。

木曽教育会では鶴三の作品展を何度か開いており、『木曽教育会百年誌』（三五一頁）によれば、昭和二二年一二月六日～八日、昭和二四年一一月一二日～一三日、昭和二五年一一月二五日～二七日、昭和三六年一一月七日・八日（於福島小学校）、昭和三八年一一月一九日の計五回である。写真には木曽教育会で預かった油彩画が複数枚写っていることから、これらの展覧会のいずれかの写真であると見てよかろう。このうち昭和二五年の展覧会は、「石井鶴三略年譜―木曽教育会との関係を中心にして―」（『木曽教育』昭和四九・三）に「島崎藤村石膏像・同木彫像・油絵・クロッキーなど」が展示されたと記されているため該当しない。昭和三六年、三八年のものも、石膏像第一作に関してはさておき木曽には制作中の木像二体と石膏像第二作との計三体があるわけで、一体のみが展示されるのは不自然である。よって写真は昭和二二年または昭和二四年の展覧会のものと考えられる。

なお、昭和二二年の展覧会については松原が、「東都もある落着きを見せた今日分身であるそれら幾点かの作品も先生のもとに帰ることになり、この機会に先生のお話をうかがうことになった。作品を周囲に、宮本武蔵の挿絵三百点と共に、ぽつりぽつり何か悟道に達した禅僧の様な深々たるものを感

じた」（「南総雑記―鶴三先生を馬籠に御案内して―」前掲）と回想している。昭和二四年の展覧会は中西によれば木像第一作の中間発表会で、「各地から集まった人々は、此の仕事の大きさと美しさに驚きと感激を覚えずには居られなかった。像を前から後から右から左からと一日中見られ、又次の日もこれをくりかえした人もあった。此の発表会には特に石井先生笹村先生の此の像についての講演会が催され、同時に両先生のご好意により、石井先生の油絵並にクロッキー回顧展が開かれた」という（中西悦夫「島崎藤村先生木彫像」前掲）。その笹村の講演と思われる「石井鶴三の藤村木彫」（『信濃教育』昭和二五・九）より、展示作品には「山上雨後」と「狂女入浴」が含まれることが分かる。

(14) ただし、「一作が完成近くなったから仕上げは藤村の出生地と、神坂村へ参りましたが一度だけで後は奈良井で御製作でありました。奈良井は大変仕事が出来ると申して喜んで居て下さいました」（鈴木迪三談　蜂谷雅「石井鶴三先生作木彫藤村像について」『木曽教育』昭和五〇・二）とあるように、永昌寺での制作はこの一度だけである。

(15) 鶴三「私の彫刻修行」（彫塑研究四十年記念講演昭和三九・一〇・二五於上田清明小『石井鶴三全集』第一一巻）に次のようにある。「造型芸術は立体性をおびてそこに二つの芸術が発生する。具象と非具象、即ち物を描写する働きを加えるのと、物を描写しない性格を加えるものと二つの活動に分れるわけで、具象性をおびたものが彫刻となり、具象性をおびないものが建築だということです。（…）だから建築と彫刻は芸術としての本質において全く同じものだといいたい。つまり立体感動をもととして、それから発展し発展するところの芸術だとこういう意味から建築と彫刻は全く同じだといってさしつかえない」。

(16) 松原常雄「藤村資料館落成と回顧」（前掲）に藤村資料館建設に関する具体的な日程の記録が見える。

(17) 「木曽教育会から馬のブロンズ寄与に関する文書」は、『木曽教育会百年誌』（三五八頁）に掲載されている「社団法人木曽教育会代議員会決議書（写）／第弐号議案／石井鶴三先生木曽馬像寄附受納に関する件」という文書のことであろう。昭和二七年五月一〇日付の決議で、木曽教育会長理事青木広助の名で、木曽馬ブロンズ像牡牝各一体を無償で寄付されたこと、永久に鄭重に保存すること、金銭上の利益を得る行為をしないことが記されている。

＊「（…）」は中略、「／」は改行を表す。

＊本稿で紹介した鶴三宛書簡・葉書の翻字は、出口智之氏、荒井真理亜氏、高野奈保氏、杲由美氏、松本和也氏がされたものである。ここに記して謝辞としたい。

© Keibunsha, Ltd. 2020/JAA2000019

図1（【書6―87】）

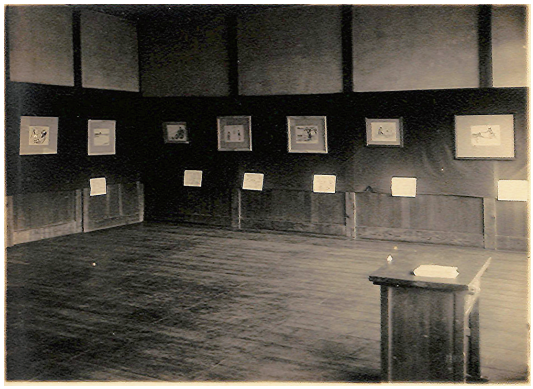

図2（【書6―87】）